

**令和6年度大学教育再生戦略推進費
「大学の世界展開力強化事業」 計画調書
～EU諸国等との大学間交流形成支援～**

[基本情報]		タイプA			
1 大学名 (○が代表申請大学)	筑波大学				
2 機関番号	代表申請大学	12102			
3 主たる交流先の相手国	フランス				
4 事業者 (大学の設置者)	ふりがな ながた きょうすけ (氏名) 永田 恭介		(所属・職名) 学長		
5 申請者 (大学の学長)	ふりがな ながた きょうすけ (氏名) 永田 恭介				
6 事業責任者	ふりがな かとう みつやす (氏名) 加藤 光保		(所属・職名) 副学長・理事(教育担当)		
7 プログラム名	【和文】 ナノ・量子・情報・生命分野融合の国際連携教育プログラム				
	【英文】 International graduate program for integrated fields of nano, quantum, information and bio-technologies				
8 分野 (該当ある場合のみ)	☒ 半導体 ☒ AI ☒ 量子技術 ☒ バイオ技術		左記のうち、主たる1分野があれば選択		
9 取組学部・研究科等名 (必要に応じ[]書きで課程区分を記入。複数の部局で合わせて取組を形成する場合は、全ての部局名を記入。大学全体の場合は全学と記入の上[]書きで全ての部局名を記入。)	学問分野	☒ 理工系 ☐ 農学系 ☐ 医歯薬系 ☐ 看護・医療系 ☐ 全学 ☐ その他			
	実施対象 (学部・大学院)	☐ 学部 ☒ 大学院 ☐ 学部及び大学院			
	数理工学科学研究群、システム情報工学研究群、生命地球科学研究群				

10. 海外相手大学				
	国名	大学名(日本語)	大学名(英語)	部局名
1	フランス	グルノーブル・アルプ大学	University of Grenoble Alpes	Faculty of Science, Grenoble INP
2	ドイツ	ルール大学ボーフム (ボーフム大学)	Ruhr University Bochum	Faculty of Computer Science
3	ベルギー	ルーベン・カトリック大学	KU Leuven	Faculty of Science
4	ドイツ	ボン大学	University of Bonn	Faculty of Mathematics and Natural Sciences
5	オランダ	ユトレヒト大学	Utrecht University	Faculty of Science
6				
7				
8				
9				
10				

11. 連携してプログラムを実施する機関(国内連携大学等)					
	大学等名	取組学部・研究科等名		大学等名	取組学部・研究科等名
1			4		
2			5		
3			6		

(大学名:筑波大学) タイプA

12. 「学校教育法施行規則」第172条の2第1項において「公表するものとする」とされた教育研究活動等の状況について、公表しているHPのURL

筑波大学

<https://www.tsukuba.ac.jp/about/disclosure-education/>

13. 本事業経費 (単位: 千円) ※千円未満は切り捨て

年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	2028年度	合 計
事業規模 (総事業費)	15,000	16,000	16,000	12,800	10,000	69,800
内 補助金申請額	15,000	16,000	16,000	10,600	5,300	62,900
内 大学負担額				2,200	4,700	6,900

14. 本事業事務総括者部課の連絡先

部課名			所在地		
責任者	ふりがな (氏名)		(所属・職名)		
担当者	ふりがな (氏名)		(所属・職名)		
	電話番号		緊急連絡 先		
	e-mail(主)		e-mail (副)		

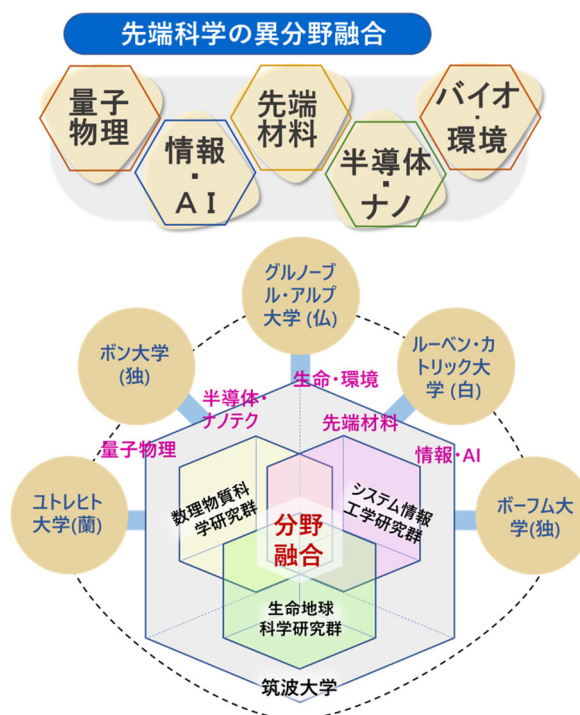
(大学名: 筑波大学) タイプA

質の保証を伴った交流プログラムの目的と内容									
① 交流プログラムの目的・概要等【1 ページ以内】									
【交流プログラムの目的及び概要等】									
本事業では、グルノーブル・アルプ大(UGA)をはじめとする欧州大学との間で、半導体・ナノテク、先端材料、量子物理、情報理工、生命・環境の各分野の交流プログラムを設置し、学生交流を発展・深化させると共に、半導体・ナノテクなどの数理物質分野、情報分野、生命分野を総合的に学修する学際領域の交流プログラムを新たに設置し、数理・情報、生命のうち複数の分野の知識と経験を身に着け、学際分野で活躍できるグローバル人材を育成する。 具体的には、以下に述べる種々の交流プログラムを実施する。 【派遣】(1) 海外大学オンライン体験(留学前交流)、(2) ダブルディグリープログラム(UGA、ボーフム大学)、(3) 数理・情報・生命の分野融合の学際履修コース(UGA)、(4) 半導体・ナノテク、量子物理、情報理工、生命・環境のそれぞれの分野における履修コース(UGA、ルーベン・カトリック大学、ボン大学、ユトレヒト大学) 【受入】(5) 海外大学オンライン体験(留学前交流)、(6) ダブルディグリープログラム(UGA、ボーフム大学)、(7) 数理・情報・生命の分野融合の学際履修コース、(8) 半導体・ナノテク、量子物理、情報理工、生命・環境のそれぞれの分野における履修コース 【双方向】(9) 共同特別講義(筑波大学・UGA の共同で短期集中講義を開講)、(10) 数理・情報・生命融合セミナー これらの交流プログラムにより、学部から大学院修士、博士課程へと段階を追って海外との交流を途切れなく進められるようにする。半導体、ナノテク、量子、情報、生命の各分野の学修に加えて、異分野の学修も経験することで、分野融合の学際領域にも対応でき、急速に変化する現代社会で活躍できる人材の養成を目指す。併せて教職員の交流も活発に行うことで、教育面のみならず研究面での協力を進め、先端科学分野における国際的なネットワーク形成と共同研究の発展を目指す。									
【養成する人材像】									
本事業で養成しようとする人材は、半導体・ナノテク、先端材料、A I、量子技術、バイオ・環境の先端工学の各分野、およびこれらの分野が融合した学際領域において、海外留学での学修を糧に自立性とグローバルな視点を身に着け、将来の技術開発を牽引できるリーダー人材である。目まぐるしく変化する現代社会においては、現時点での最先端の技術を身に着けているだけでなく、急速な技術の変化・革新に対応できる柔軟性と先進性を持つ人材が求められている。海外との交流により、知識の体系を学ぶのみならず、分野および国境の壁を越えて広い視野と柔軟な学びの力を身に着け、自由な発想に基づくイノベーションを実現できる人材の育成を目指す。そのような人材育成のため、海外交流を通じて以下の能力が身に着くよう取り組む。 (1) 深い知識に加え、異分野も理解し、学際領域にも対応できる学びの広さ (2) 国際的なコミュニケーションができる語学力 (3) 異なる考え方を受入れ、擦り合わせのできる柔軟性 (4) 自ら学び、課題に取り組む意欲、自主性 (5) 協調性とリーダーシップ									
【本プログラムで計画している交流学生数】 各年度の派遣及び受入合計人数(交流期間、単位の取得の有無は問わない)									
2024 年度		2025 年度		2026 年度		2027 年度		2028 年度	
派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
19	19	67	73	72	77	78	79	78	79

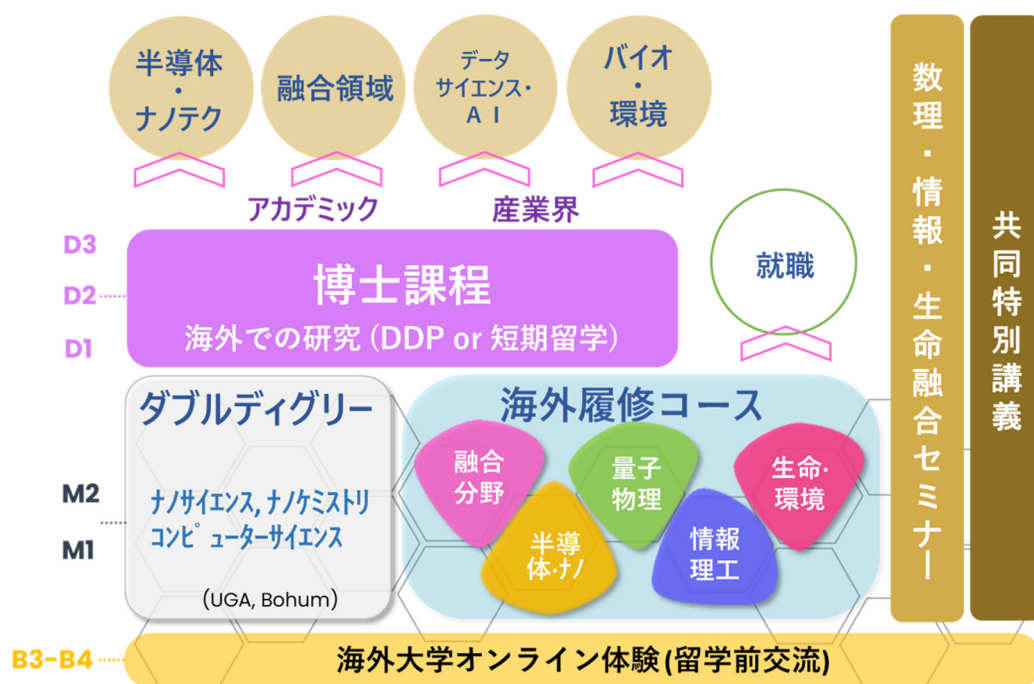
(大学名：筑波大学) (タイプ：A)

② プログラムの概念図【1 ページ以内】

ナノ・量子・情報・生命分野融合の国際連携教育プログラム



交流プログラム概要



(大学名：筑波大学) (タイプ：A)

③ 国内大学等の連携図【1 ページ以内】

本学はこれまで国際連携に積極的に取り組み、本事業の取組組織となる数理物質科学研究群、システム情報工学研究群、生命地球科学研究群とも交流相手の欧州大学とはこれまでも学生および教員の交流の実績を有している。本事業は、これらの交流を拡大、深化させることを意図していることから、本学が単独で行うことが適切であると考え、申請する次第である。尚、本事業の遂行により得られる成果は、積極的に学外に発信し、国内の他大学への展開にも貢献したいと考えている。

④ 交流プログラムの内容及び大学間交流の枠組み形成【8 ページ以内】

【実績・準備状況】

本学はスーパーグローバル大学創成支援事業(トップ型)の採択校として、「トランスボーダー大学がひらく高等教育と世界の未来」の構想の下、海外大学との交流・連携を活発に行い、国際化を強力に推進してきた。その取組の一つである Campus-in-Campus (CiC) 構想では、海外の交流相手校と互いに教育研究資源を共有して、学生と教職員の自由で持続的な協働の場を展開し、より密接に交流・連携することを目指している。現在まで世界トップレベルの 13 大学が本学の CiC のパートナーとなり、教育と研究における協業を行っている。本学のこれまでの海外交流の中で、理工系分野での欧州大学との交流はとりわけ重要な位置を占めており、本事業申請で交流相手として挙げた大学とはこれまで以下の通りの交流の実績を有している。

◎ グルノーブル・アルプ大学 (UGA) (フランス)

- 交流協定 (部局間 2002～、全学 2007～)、CiC パートナー (2017～)
- ダブルディグリープログラム 修士課程 物理工学・物質工学専攻 2018～、コンピューターサイエンス 2023～
- 海外招致ユニットによる共同研究・学生交流 (2016～ 半導体分野)
- CNRS の海外研究拠点の設置 (J-FAST, 2022～)
- 数理物質、情報分野で多くの短期留学生を受入れ

◎ ルール大学ボーフム (ボーフム大学) (ドイツ)

- CiC パートナー (2019～)
- 情報分野での学生交流

◎ ルーベン・カトリック大学 (KUL) (ベルギー)

- CiC パートナー (2024～)
- 半導体分野での共同研究、学生交流 (大学間マイクロエレクトロニクス研究センター (IMEC) での実習など)

◎ ボン大学 (ドイツ)

- 全学交流協定 (2011～)
- 物理学分野での共同研究、学生交流

◎ ユトレヒト大学 (オランダ)

- CiC パートナー (2017～)
- 物理学分野での共同研究、学生交流

本事業は、以上のような相手大学とのこれまでの交流実績を踏まえ、学生交流のさらなる発展・深化を目指すものである。本事業では、半導体・ナノテク、先端材料、量子物理、情報理工、生命・環境の先端工学のそれぞれの分野の交流プログラムを設置すると共に、これまで別々に交流を行って来た半導体・ナノテクなどの数理物質分野、情報分野、生命分野の融合領域の開拓を目指し、数理、情報、生命の分野を総合的に学修する学際領域の交流プログラムを新たに設置し、数理・情報・生命のうち複数の分野の知識と経験を身に付け、学際分野で活躍できるグローバル人材を育成する。

(大学名：筑波大学) (タイプ：A)

【計画内容】

上欄で述べたような欧州大学とのこれまでの交流の実績を踏まえ、本事業では半導体・ナノテク、先端材料、量子物理、情報理工、生命・環境の先端工学の各分野の交流プログラムを設置し、学生交流を発展・深化させると共に、半導体・ナノテクなどの数理物質分野、情報分野、生命分野を総合的に学修する学際領域の交流プログラムを新たに設置し、数理・情報・生命のうち複数の分野の知識と経験を身に着け、学際分野で活躍できるグローバル人材を育成する。学生の交流と併せて教職員の交流も活発に行うことで、教育面のみならず研究面での協力を進め、先端科学分野における国際的なネットワーク形成と共同研究の発展を目指す。具体的には、以下に述べるような種々の交流プログラムを実施し、学部から大学院修士、博士課程へと段階を追って海外との交流を途切れなく進められるようにする。半導体・ナノテク、量子物理、情報理工、生命・環境の各分野の学修に加えて、異分野の学修も経験することで、分野融合の学際領域にも対応でき、急速に変化する現代社会で活躍できる人材の養成を目指す。以下、交流プログラムの具体的な内容を説明する。

【学生の派遣】**(1) 海外大学オンライン体験(留学前交流)**

筑波大学の学生(主に学部 3-4 年)を対象に交流相手の大学をオンラインで体験する機会を設ける。大学の概要、教育・研究の特色、交流プログラムを紹介し、留学経験者の体験談などを盛り込むことで、留学を身近に感じて貰うと共に、心理的障壁を低くすることを目論む。さらに経済的支援、交流プログラムの狙いと期待される効果、キャリアパスの観点からの意義などを説明し、多くの学生に留学を前向きに捉えるよう促す。

(2) ダブルディグリープログラム(DDP) (修士課程)**(2-1) UGA との DDP**

UGA と筑波大学の数理物質科学、システム情報工学の両研究群との間には修士課程の DDP が既に設置・運営されている。この DDP では UGA 側にはナノサイエンス、ナノケミストリー、コンピューターサイエンスの 3 つのコースが設置され、ナノサイエンス、ナノケミストリーには半導体・ナノテク、先端材料分野の学生が、コンピューターサイエンスのコースには情報分野の学生が参加している。本事業でこの DDP の枠組みを利用した学生の派遣、受入を引き続き行う。その際、講義のカリキュラムを一部変更し、ナノサイエンス、ナノケミストリーのコースにはデータサイエンス、AI などの情報分野およびバイオ・環境技術などの生命分野の講義を取り入れ、コンピューターサイエンスのコースには半導体・ナノテクなどの数理物質分野およびバイオ・環境技術などの生命分野の講義を取り入れ、希望する学生には複数の分野の学修ができるようにする。加えて、DDP に参加する学生数の増加を目指す。特にこれまでは海外から受け入れる学生数に比べて派遣する学生数が少ないというアンバランスの傾向があったが、(1) のオンライン体験ほかの機会での留学に対する心理的バリアを取り除き、加えて留学を躊躇する理由としてしばしば挙げられる就職活動に関する適切な支援を行うことで、筑波大学から海外への留学を促す。さらに UGA との間で量子物理分野および生命・環境分野の交流を進め、量子物理分野の方では事業年度の後半に DDP の設置を目指す。

(2-2) ボーフム大学との DDP

ボーフム大学とはこれまで主にシステム情報工学分野で学生交流を行って来たが、2025 年度よりコンピューターサイエンスの DDP を設置し、学生の派遣、受入れを行う。初年度は派遣、受入れともそれぞれ 2 名程度の学生の参加を見込むが、(2-1)の UGA の DDP と同様、その後の参加学生の増加、および派遣と受入れのバランスが取れるよう、オンライン体験ほかの機会での学生への働きかけ、および支援を行う。

(3) 数理・情報・生命融合の学際履修コース（修士課程）

UGA に半導体・ナノテクの数理物質分野、情報分野、生命分野の複数の分野を学ぶ履修コースを設ける。履修コースは数理物質、情報、生命のそれぞれの分野および学際分野の講義とインターンシップにより構成する。講義は UGA の大学院修士課程で開講されている通常の講義に加えて、両大学が共同で開講する短期集中型の特別講義を用意する。この共同特別講義は UGA と筑波大学の教員が協力して担当し、一部は筑波大学、UGA の教員がオンラインまたは相手方の大学に赴いて講義を行う（(9)で後述）。一方、インターンシップの方は UGA の人工知能学際研究所(MIAI)や UGA と密接な協力関係にあるグルノーブル地区の研究機関（例えばフランス原子力庁(CEA)の電子情報技術研究所(LETI)、国立健康医療研究所(INSERM)）などの協力を得て、人工知能、半導体微細加工、バイオ技術の最先端の実習内容を提供する。このコースに参加する学生は、1 年次前半には上記の共同特別講義および数理・情報・生命融合セミナー（(10)で後述）をオンラインで受講して学際分野の学修を行い、1 年次後半から 2 年次にかけての期間に渡航して、現地での講義の受講ならびにインターンシップを行うこととする。この学際履修コースの履修により、半導体・ナノテクなどの物質科学分野、AI・データサイエンスなどの情報工学分野、バイオ技術・医療応用などの生命・環境分野のうち複数の分野の知識と経験を身に着け、学際分野で能力を発揮できる人材を養成する。特に筑波大学の数理物質科学研究群所属の学生は情報ないし生命分野の、システム情報工学研究群所属の学生は数理物質ないし生命分野の、生命地球科学研究群の学生は数理物質ないし情報分野の学修に重点を置くよう奨励し、複数の分野の知識、経験を身に着け、複数分野に跨る学際領域の研究開発に携わることのできる学生を輩出する。

(4) 各分野の履修コース（修士課程）

UGA、ルーベン・カトリック大学(KUL)、ボン大学、ユトレヒト大学に半導体・ナノテク、量子物理、生命・環境のそれぞれの分野の履修コースを設け、学生の派遣、受入れを実施する。KUL はナノエレクトロニクスの研究拠点であると共にバイオ・農学・環境分野で強みを有し、ボン大学は“Matter and Light for Quantum Computing”（ML4Q）と称する量子技術の卓越研究ネットワークの拠点であり、またユトレヒト大学は主に理論物理の分野で強みを有する。これらの各大学の特徴に鑑み、半導体・ナノテク・先端材料の履修コースを KUL に、量子物理の履修コースをボン大学とユトレヒト大学に、生命・環境分野の履修コースを UGA と KUL に設置する。履修コースの構成自体は、(3)の学際履修コースと同様に講義とインターンシップからなり、学生は 1 年次後半から 2 年次にかけての時期に渡航し、現地で講義を受講し、インターンシップを行うものとする。但し、学生の希望および渡航期間により、講義とインターンシップのどちらか一方のみ履修も可とする。このコースを履修する学生は、1 年次前半に共同特別講義および数理・情報・生命融合セミナーをオンラインで受講し、各分野の学修を進める。インターンシップの方はそれぞれの大学の研究室な

（大学名：筑波大学）（タイプ：A）

らび協力研究機関（KUL の場合は隣接する大学間マイクロエレクトロニクス研究センター(IMEC)など）で行い、現地の学生と共同して課題に取り組むプログラムを実施する。

(3)、(4)の履修コースは、運営、学生派遣が順調に推移すれば、その発展としてダブルディグリーの一の設置を検討する。

【学生の受入】

(5) 筑波大学のオンライン体験（事前交流）

交流相手の各大学の学生(主に学部生)を対象に、筑波大をオンラインで体験する催しを開催する。筑波大学の概要、教育・研究の内容、交流プログラムの紹介し、留学経験者の体験談などを盛り込み、筑波大学への留学を促す。

(6) ダブルディグリープログラム(DDP)（修士課程）

(6-1) UGA との DDP

(2-1)で述べた通り、UGA とは数理物質、システム情報工学の分野で修士課程 DDP を既に設置し、筑波大学側の応用理工学、国際マテリアルズイノベーション、化学、情報理工学の各学位プログラムで学生を受入れている。この DDP の枠組みでの学生の受入れを継続する。学生の派遣の場合と同じように、経済、生活面の支援を充実させ、学生に十分な学修成果を上げて貰うことで、DDP の魅力を高め、受入学生数の増加を図る。

(6-2) ボーフム大学との DDP

(2-2)で述べた通り、ボーフム大学との間でシステム情報分野の DDP を 2025 年度にスタートさせ、情報理工学学位プログラムで学生を受入れる。(6-1)と同じく、学生への支援を充実させることにより、DDP の魅力を高め、受入れ学生数の増加を図る。

(7) 数理・情報・生命分野融合の学際履修コース（修士課程）

筑波大学の数理物質科学、システム情報工学、生命地球科学の3研究群の協力により、半導体・ナノテク・先端材料等の数理分野、情報理工分野、および生命・環境分野を融合した学際履修コースを設置し、学生を受入れる。講義の構成は、数理物質科学、システム情報工学、生命地球科学のそれぞれの研究群の既存の講義科目に加えて、数理・情報・生命の融合分野の講義を立ち上げる。((9)の共同特別講義も活用する。)

(8) 各分野の履修コース（修士課程）

筑波大学の数理物質科学、システム情報工学、生命地球科学の各研究群に半導体・ナノテク、量子物理、情報理工、生命・環境の履修コースを設け、交流相手の全ての大学からの学生を受入れる。各履修コースは講義とインターンシップから構成するが、学生の希望や留学期間に応じて、どちらか一方のみの履修も可とする。留学前の1年次には共同特別講義および数理・情報・生命融合セミナーをオンラインで聴講して、各分野の学修を進め、1年次後半から2年次にかけての期間に渡航し、筑波大学での講義の受講、インターンシップを実施するものとする。数理物質科学、システム情報工学、生命地球科学の各研究群の大学院講義は英語で行われているものが多くあり、学生が希望する内容の講義を選択する上で問題はない。インターンシップは筑波大学内の研究室のみならず、つくば地区の研究機関(物材機構、産総研、農研機構ほか)や民間企業(エア・リキッド・ジャパンなど)の協力を得、大学外でも実施する。

(大学名：筑波大学) (タイプ：A)

【双方向の交流プログラム】

(9) 共同特別講義

(3)でも触れたが、筑波大学と UGA の共同で短期集中型の特別講義を開講する。半導体・ナノテク、情報理工、生命・環境のそれぞれの分野に加えて、両分野に跨る学際的な内容の講義も用意する。講師は、UGA と筑波大学の教員が協力して担当し、一部は筑波大学、UGA の教員がオンラインまたは相手方の大学に赴いて講義を行う。この共同特別講義はオンライン中継により他方の大学でも聴講できるようにし、本事業の履修コースに参加する筑波大学および海外大学の学生が渡航前の 1 年次に受講できるようにする。加えて筑波大学および海外大学の交流プログラムに参加しない一般学生の受講も受け入れると共に、JV-Campus のコンテンツとしても提供し、全国の大学での活用に供する。

(10) 数理・情報・生命融合セミナー（オンライン）

筑波大学と UGA と共同で、数理物質分野、システム情報分野、生命科学分野のそれぞれの研究内容を含むオンラインセミナーを開催する。時差を考慮して半日の集中セミナーを年に 3-4 回開催し、各々の分野および分野融合のテーマで、チュートリアル的な内容から最先端の研究紹介に亘る発表を行う。UGA および筑波大学の教員および学生が発表を行い、発表後には両大学の教員、学生を交えて分野融合による新しい技術の創出についてのディスカッションを行う。セミナーの企画は主として学生が担当する。セミナーへの参加や発表の記録を作成し、一定回数の参加、発表により単位を授与し、また修了証を発行する。

(11) 交流学生のネットワーク形成・留学後サポート

本事業の交流プログラムに参加する／した学生を対象にしたネットワークを形成して、学生同士の交流を支援する。本学では留学生を対象とした“Tsukuba Alumni Network”が整備され、国・地域別、プログラム別の留学生コミュニティが形成されている。この仕組みを活用し、本事業の交流プログラムに参加する／した学生にネットワークへの加入を促し、学生同士の交流を促し、修了後の人的ネットワーク形成に役立てる。

また本事業のこれらの交流プログラムは修士課程の学生を対象としたものであるが、これらに参加した学生は、修士課程修了後は博士課程に進学して、学修と研究をさらに発展させることを強く期待する。交流プログラムの参加学生がその海外体験を活かし、学修、研究をさらに発展させられるよう、博士課程進学を促すさまざまな働きかけを行う。修士課程修了後は筑波大学大学院の博士課程に進学することを期待するが、志のある学生に対しては、海外大学の博士課程への進学も後押しする。筑波大学大学院の博士課程に進学した学生に対しては、本事業の相手大学との間で設置している DDP への参加や、他の機会を活かして、海外での研究を経験できるよう支援する。このようにして、修士、博士課程で途切れなく海外交流の体験を持つことで、将来はこれらの海外経験を活かしてアカデミック、あるいは産業界で世界をリードする人材となることを期待する。

達成目標【①～②-2 合わせて 4 ページ以内】
① 養成しようとするグローバル人材像について
(i) プログラム計画全体の達成目標（プログラム開始～2028 年度まで）
本事業で養成しようとする人材は、半導体・ナノテク、先端材料、A I、量子、バイオ・環境技術の先端工学の各分野、およびこれらの融合した学際領域において、海外留学での学修を糧に自立性とグローバルな視点を身に付け、将来の技術開発を牽引できるリーダー人材である。目まぐるしく変化する現代社会においては、現時点での最先端の技術を身に付けているだけでなく、急速な技術の変化・革新に対応できる柔軟性と先進性を持つ人材が求められている。海外との交流により、知識の体系を学ぶのみならず、分野および国境の壁を越えて広い視野と柔軟な学びの力を身に付け、自由な発想に基づくイノベーションを実現できる人材の育成を目指す。 具体的には、交流プログラムの参加学生が修得することを期待する能力は以下の通りである。 (1) 自らの専門分野の深い知識に加え、異なる分野も理解し、学際領域にも対応できる学びの広さと柔軟性 (2) 国際的なコミュニケーションができる十分な語学力と社交性 (3) 異なるものの見方、考え方を受入れ、自らの考えと擦り合わせて対応できる柔軟性 (4) 自ら進んで学び、課題解決に取り組む意欲、自主性 (5) 周りの人と協力して取り組む協調性とチームを纏め、牽引するリーダーシップ 以上のような能力を持つ人材の養成のため、本事業では以下のような数値目標を設定する。 それぞれの交流プログラムの参加学生数の累計(延べ人数)として、 ・ ダブルディグリープログラム 70 名（派遣 35 名、受入 35 名） ・ 各分野の履修コース 45 名（派遣 15 名、受入 30 名） ・ 数理・情報・生命融合の学際履修コース 16 名（派遣 9 名、受入 7 名） ・ 数理・情報・生命融合セミナー 240 名 加えて、交流プログラムの成果に係わるアウトカムとして、参加学生の修了後の進路についての目標を挙げる。本事業の交流プログラムは主に修士課程を対象としており、参加学生の修士課程修了後の進路は本人の希望によりさまざまであると考えられるが、参加学生は海外留学の経験を活かし、修士課程修了後は博士課程に進学して、学修と研究をさらに発展させることを期待する。博士課程進学後も、本事業の相手大学との間で設置している DDP への参加や、他の機会を活かして、海外での研究を経験できるよう支援する。将来は修士・博士課程での海外経験を活かしてアカデミック、あるいは産業界で世界をリードする人材となることを期待する。このような観点から、博士課程への内部進学率を目標数値として掲げる。
(ii) 中間評価までの達成目標（プログラム開始～2025 年度まで）
本事業の開始から 2025 年度までは、種々の交流プログラムの立ち上げ期に相当する。既に設置しているグルノーブル・アルプ大学との DDP については学生の派遣、受入を継続するが、学部段階の広報や支援を充実させることで、参加学生数の増加を図る。グルノーブル・アルプ大学との融合分野の履修コース、融合セミナーについては、相手大学との調整を進め、2025 年度の開設と初年度から学生の派遣・受入が出来るように取り計らう。ボーfum大学との DDP についても、2025 年度から学生の派遣・受入を実現する。他の大学との交流プログラムについては、2026 年に開設できるよう着実に準備を進める。

(大学名：筑波大学) (タイプ：A)

②-1 学生に修得させる具体的能力のうち、一定の外国語力基準をクリアする日本人学生数の推移について

(i) 本プログラム計画において定める外国語力基準及び同基準をクリアする学生数に関する達成目標

単位：人（延べ人数）

外国語力基準		達成目標	
		中間評価まで (プログラム開始～2025年度まで)	事後評価まで (プログラム開始～2028年度まで)
【参考】本プログラム計画において派遣する日本人学生合計数		86	311
1	TOEIC860 点以上 (CEFR B2 相当)	10	46
2	TOEIC730 点以上 (CEFR B1 相当)	30	125
3			

(ii) 外国語力基準を定めた考え方

本学がスーパーグローバル大学創成支援事業（SGU）で定めていた外国語力基準（TOEFL-ITP550 点以上、換算 TOEIC730 点以上）を標準とする。同事業が終了となった 2023 年度末時点において、本基準を満たす学生は、学群・大学院を合わせて 32.2%を目標としていた。SGU 事業は終了していることから、これをすでに満たしているべき数値として本プログラムに参加する日本人学生の 35%、事後評価までに 40%が当該基準に達することを目標とする。

さらに、上位基準として TOEIC860 点以上を設定し、中間評価までに 10%、事後評価までに 15%当該基準に達することを目標とする。この基準は、CEFR における「Independent User (B2)」に相当する。本等級が示す熟達度は「専門分野の技術的な議論を含め、具体的・抽象的なトピックに関する複雑なテキストの主旨を理解できる。母語話者とお互いに緊張することなく交流することができる程度に流暢かつ自然である。幅広いテーマについて、明確で詳細な文章作成することができ、様々な選択肢の利点と欠点を挙げながら見解を説明することができる」とされている。この能力は、本プログラムが養成しようとするグローバル人材像とも重なることから、目指すべき上位基準としてふさわしいと考える。

(iii) プログラム計画全体の目標達成に向けたプロセス（プログラム開始～2028 年度まで）

事業開始年度の 2024 年度から、留学前交流として学群生を対象に「海外大学オンライン体験」の実施を開始し、相手国の言語や文化に触れる機会を設ける。最終的な目標参加学生数は 135 名とする。この他、学類での講義や授業以外での英語力を向上させる機会を提供する。また大学院生を対象に初年度はグルノーブル・アルプ大学 (UGA)、次年度からはボーフム大学とのダブルディグリープログラム (DDP) を開始する。DDP における実渡航期間は原則 1 年とし、英語による異分野理解、国際的なコミュニケーション力などを身に付けさせる。最終年度までに 35 名の派遣を目標とする。

上記以外に、2025 年度からハイブリッド型の「海外履修コース」（目標派遣学生数 15 名）、オンラインで履修する「数理・情報・生命融合セミナー」（目標参加学生数 120 名）及び「共同特別講義」（目標参加学生数 80 名）を開設し、結果的に実渡航に至らない学生にとっても英語実践力向上を目指せる機会を提供する。

（大学名：筑波大学）（タイプ：A）

(iv) 中間評価までの目標達成に向けたプロセス（プログラム開始～2025 年度まで） 上述の「(iii) 事業計画全体の目標達成に向けたプロセス（事業開始～2027 年度まで）」と同様、2025 年度までに留学前オンライン交流、UGA 及びボーフム大学との DDP、「数理・情報・生命融合セミナー」、「共同特別講義」、「海外履修コース」を開始し、実渡航/オンライン履修にかかわらず英語実践力向上が目指せる機会を提供する。
②-2 学生に習得させる具体的能力のうち、「②-1」以外について
(i) プログラム計画全体の達成目標（プログラム開始～2028 年度まで） 筑波大学では、教育目標の達成の基準として、学士／修士／博士課程のそれぞれの課程ですべての学生が習得すべき知識・能力等として、以下のような「汎用コンピテンス」を定めている。 学士：コミュニケーション能力、批判的・創造的思考力、データ・情報リテラシー、広い視野と国際性、心身の健康と人間性・倫理性、協働性・主体性・自律性 修士：知の活用力、マネジメント能力、コミュニケーション能力、チームワーク力、国際性 博士：知の創造力、マネジメント能力、コミュニケーション能力、チームワーク力、国際性 達成目標①の欄で挙げた(2)～(5)の能力は、基本的には汎用コンピテンスと重なる内容である。学生は本事業の海外交流により、より高いレベルの国際コミュニケーション、柔軟性、自主・自律性、協調性・リーダーシップの各能力が身に着くよう、交流プログラムの各段階(事前、海外留学中、事後)で適切に指導すると共に、事後の検証により交流プログラムの内容を改善する。 さらに、(1)の学際領域への対応能力については、理工系のあらゆる分野においてデータサイエンス、AI など情報理工の知識・技法の必要性は高まっており、そのような知識・技法を身に着けた人材は益々必要とされている。本事業では、交流プログラムとして、数理・情報・生命の分野融合の学際履修コースおよび数理・情報・生命融合セミナーを開設し、学生に数理、情報、生命のうち複数の分野の知識を身に着けさせ、複数分野の学際領域での研究開発を行える人材を育成する。加えて、従来の半導体・ナノテク、量子物理、情報理工、生命・環境のそれぞれの分野の交流プログラムに参加する学生にも異なる分野の重要性を認識させ、最低限の知識と必要に応じて学べる「マインド」を獲得させる。
(ii) 中間評価までの達成目標（プログラム開始～2025 年度まで） 筑波大学の汎用コンピテンスと重なる(2)～(5)の能力については、2025 年までの中間期間においても全事業期間の目標と同様であり、国際コミュニケーション、柔軟性、自主・自律性、協調性・リーダーシップが身に着くよう、交流プログラムの各段階(事前、海外留学中、事後)で適切に指導する。とりわけ、本事業のスタート段階では、留学前交流を重視し、内容の工夫により多くの学生に海外での学びの魅力を伝えて留学に誘うと共に、留学により獲得が期待される能力の重要性を認識させる。(実際には海外留学に至らない学生に対しても、同じような認識を持って貰えるよう工夫をし、将来のキャリアに活かして貰えるようにする。)

(大学名：筑波大学) (タイプ：A)

③ 本プログラム計画において海外に留学する日本人学生数の推移【1 ページ以内】						
現状（2024年5月1日現在）※1				88 人		
(i) 日本人学生数の達成目標						
単位：人（延べ人数）						
プログラム計画全体の達成目標（プログラム開始～2028 年度まで）				314		
中間評価までの達成目標（プログラム開始～2025 年度まで）				86		
(上記の内訳)						
(ii) 目標を設定した考え方及び達成までのプロセス（プログラム計画全体、中間評価までの双方について）						
単位：人						
	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	2028 年度	合計
実際に渡航する学生	4	6	7	9	9	35
自国にて国際教育・交流プログラムを オンラインで受講する学生	15	60	60	60	60	255
実渡航とオンライン受講を行う学生	0	1	5	9	9	24
合計人数	19	67	72	78	78	314
(a) 実渡航による交流						
グルノーブル・アルプ(UGA)大学、ボーフム大学とのダブルディグリープログラム(DDP)は、参加する学生が実際にそれぞれの大学に渡航し、原則として1年間滞在することを想定している。参加学生数については、本事業開始の2024年度にUGAのDDPの3コース(ナノサイエンス、ナノケミストリー、コンピューターサイエンス)に各1-2名、翌2025年度にはボーフム大学とのDDPが開始され、学生1-2名が参加することを見込む。さらにその後は、参加学生数を少しずつ増やし、最終年度には全部で10名程度の学生の参加を目指す。						
(b) オンラインによる交流						
オンラインによる交流プログラムは、留学前交流、および数理・情報・生命融合セミナーが該当する。留学前交流は、2024年度に開始し、初年度は15名、その後は30名程度の参加を目指す。融合セミナーは2025年度から開始し、毎年30名程度の参加を目標とする。						
(c) 実渡航とオンラインを組み合わせたハイブリッド型の交流						
各大学との間に設置される各分野および学際分野の履修コースは、ハイブリッド型の交流を想定している。修士課程1年次前半に、数理・情報・生命融合セミナーと共同特別講義をオンラインで履修し、1年次後半から2年次にかけての時期に実際に相手大学に渡航して学修する。UGAに設置する数理・情報・生命融合の学際履修コースは2025年に開始し、他の大学に設置する各分野の履修コースは2026年から開始する。参加学生数は、開始当初は各コース1-2名とし、その後、少しずつ増加するようさまざまな働きかけ、支援を行う。						

※現状は、プログラムの取組単位（全学、学部等）における2024年5月1日現在の人数。

（大学名：筑波大学）（タイプ：A）

④ 本プログラム計画において受け入れる外国人学生数の推移【1 ページ以内】						
現状（2024年5月1日現在）※1				2977 人		
(i) 外国人学生数の達成目標						
単位：人（延べ人数）						
プログラム計画全体の達成目標（プログラム開始～2028 年度まで）				327		
中間評価までの達成目標（プログラム開始～2025 年度まで）				92		
(上記の内訳)						
(ii) 目標を設定した考え方及び達成までのプロセス（プログラム計画全体、中間評価までの双方について）						
単位：人						
	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	2028 年度	合計
実際に渡航する学生	4	6	7	9	9	35
自国にて国際教育・交流プログラムを オンラインで受講する学生	15	60	60	60	60	255
実渡航とオンライン受講を行う学生	0	7	10	10	10	37
合計人数	19	73	77	79	79	327
(a) 実渡航による交流						
③の日本人学生派遣と同じく、グルノーブル・アルプ(UGA)大学、ボーフム大学とのダブルディグリープログラム(DDP)は、実渡航による交流を想定している。事業開始の2024年度は、UGAから応用理工学、情報理工学の各学位プログラムに1-2名の学生を受入れ、2025年度にボーフム大学との間にDDPを設置し、やはり1-2名程度の学生を受入れる。その後、年度ごとに参加学生数を少しずつ増やし、最終年度には全部で10名程度の学生の受入を目指す。						
(b) オンラインによる交流						
③と同じく、オンライン交流は留学前交流と融合セミナーが該当し、日本人学生と同数程度の学生の参加を目標とする。						
(c) 実渡航とオンラインを組み合わせたハイブリッド型の交流						
③と同じく、各分野および融合分野の学際履修コースは、ハイブリッド型の交流を想定している。修士課程1年次前半に、数理・情報・生命融合セミナーと共同特別講義をオンラインで履修し、1年次後半から2年次にかけての時期に実際に来日して筑波大学で学修を行う。履修コースは2025年度に開始、開始年度は各コース1-2名の学生を受入れ、その後、受入学生の増加を目指す。						

※現状は、プログラムの取組単位（全学、学部等）における2024年5月1日現在の人数。

（大学名：筑波大学）（タイプ：A）

⑤ 交流学生数について（2024年度はプログラム開始以後の人数）

（単位：人）

(i) 本プログラムで計画している交流学生数

各年度の派遣及び受入合計人数 (交流期間、単位取得の有無等の 内訳は (iii) 表参照)	2024年度		2025年度		2026年度		2027年度		2028年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
	19	19	67	73	72	77	78	79	78	79	314	327
実際に渡航する学生 (以下「実渡航」)	4	4	6	6	7	7	9	9	9	9	35	35
自国にて国際教育・交流プログラムをオ ンラインで受講する学生 (以下「オンライン」)	15	15	60	60	60	60	60	60	60	60	255	255
実渡航とオンライン受講を行う学生 (以 下「ハイブリッド」)	0	0	1	7	5	10	9	10	9	10	24	37

(ii) 国内大学及び交流プログラムごとの交流学生数

交流形態	①	単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	学生別	A	学部生
	②	単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		B	大学院生
	③	単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流			
	④	上記以外の交流期間30日未満の交流			
	⑤	上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流			
	⑥	上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流			
			案 オ ハ	実際に渡航する学生	
				自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講する学生	
				海外でオンライン受講を行う学生（ハイブリッド）	

1. 【代表申請大学】

大学名		筑波大学																	
交流プログラム名 (相手大学名)	交流 方向	交流 形態	学生別	2024年度			2025年度			2026年度			2027年度			2028年度			合計
				実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	
海外大学オンライン体験(留学前交流) (全ての大学)	派遣	④	A		15			30			30			30			30		135
筑波大学オンライン体験(留学前交流) (全ての大学)	受入	④	A		15			30			30			30			30		135
ダブルディグリープログラム (UGA)	派遣	③	B	4			4			5			6			6			25
ダブルディグリープログラム (ボーフ大)	派遣	③	B				2			2			3			3			10
数理・情報・生命融合学際履修コース (UGA)	派遣	②	B						1			2			3			3	9
半導体・ナノテク履修コース (KUL)	派遣	②	B									1			2			2	5
量子物理履修コース (ボン大、ユトレヒト大)	派遣	②	B									1			2			2	5
生命・環境履修コース (UGA、KUL)	派遣	②	B									1			2			2	5
ダブルディグリープログラム (UGA)	受入	③	B	4			4			5			6			6			25
ダブルディグリープログラム (ボーフ大)	受入	③	B				2			2			3			3			10
数理・情報・生命融合学際履修コース (全ての大学)	受入	②	B						1			2			2			2	7
半導体・ナノテク履修コース (全ての大学)	受入	②	B						2			2			2			2	8
量子物理履修コース (全ての大学)	受入	②	B						1			2			2			2	7
情報理工履修コース (全ての大学)	受入	②	B						2			2			2			2	8
生命・環境履修コース (全ての大学)	受入	②	B						1			2			2			2	7
数理・情報・生命融合セミナー (全ての大学)	派遣	①	B					30			30			30			30		120
数理・情報・生命融合セミナー (全ての大学)	受入	①	B					30			30			30			30		120

2. 【国内連携大学等】

大学名		7																	
交流プログラム名 (相手大学名)	交流 方向	交流 形態	学生別	2024年度			2025年度			2026年度			2027年度			2028年度			合計
				実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	
	派遣																		0
	受入																		0
	派遣																		0
	受入																		0

(大学名： 筑波大学) (タイプ： A)

(iii) 本プログラムで計画している交流学生数（派遣・受入別 各内訳の集計）

【日本人学生の派遣】		2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	2028 年度	合計
年度別合計人数	学生別	19	67	72	78	78	314
【交流形態別 内訳】							
① 単位取得を伴う交流期間30日未満の交流		0	30	30	30	30	120
	実渡航						0
	オンライン		30	30	30	30	120
	ハイブリッド						0
② 単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		0	1	5	9	9	24
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド		1	5	9	9	24
③ 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流		4	6	7	9	9	35
	実渡航	4	6	7	9	9	35
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
④ 上記以外の交流期間30日未満の交流		15	30	30	30	30	135
	実渡航						0
	オンライン	15	30	30	30	30	135
	ハイブリッド						0
⑤ 上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
⑥ 上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0

(大学名： 筑波大学) (タイプ： A)

【外国人学生の受入】		2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	2028 年度	合計
年度別合計人数	学生別	19	73	77	79	79	327
【交流形態別 内訳】							
① 単位取得を伴う交流期間30日未満の交流		0	30	30	30	30	120
	実渡航						0
	オンライン		30	30	30	30	120
	ハイブリッド						0
② 単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		0	7	10	10	10	37
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド		7	10	10	10	37
③ 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流		4	6	7	9	9	35
	実渡航	4	6	7	9	9	35
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
④ 上記以外の交流期間30日未満の交流		15	30	30	30	30	135
	実渡航						0
	オンライン	15	30	30	30	30	135
	ハイブリッド						0
⑤ 上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
⑥ 上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0

(大学名： 筑波大学) (タイプ： A)

(iv) 派遣・受入別 交流プログラム学生数の詳細

①日本人学生の派遣【計画】

年度	交流期間		派遣元大学	派遣先大学	派遣相手国	交流内容 (交流プログラム名等)	交流形態	学生別	交流学生数	(内訳)		
										実渡航	オンライン	ハイブリッド
2024	2024年10月	～	2024年10月	筑波大学	全ての大学	仏・独・白・蘭	海外大学オンライン体験(留学前交流)	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	15		15
	2024年10月	～	2025年3月	UGA	フランス	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	4	4		
2025	2025年5月	～	2025年5月	UGA	全ての大学	仏・独・白・蘭	海外大学オンライン体験(留学前交流)	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	30		30
	2025年10月	～	2026年3月	UGA	フランス	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	4	4		
	2025年10月	～	2026年3月	ボーフム大	ドイツ	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	2	2		
	2025年10月	～	2026年3月	UGA	フランス	数理・情報・生命融合学際履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	1			1
	2025年5月	～	2025年12月	UGA	全ての大学	仏・独・白・蘭	数理・情報・生命融合セミナー	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	30		30
2026	2026年5月	～	2026年5月	UGA	全ての大学	仏・独・白・蘭	海外大学オンライン体験(留学前交流)	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	30		30
	2026年10月	～	2027年3月	UGA	フランス	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	5	5		
	2026年10月	～	2027年3月	ボーフム大	ドイツ	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	2	2		
	2026年10月	～	2027年3月	UGA	フランス	数理・情報・生命融合学際履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2			2
	2026年10月	～	2027年3月	KUL	ベルギー	半導体・ナノテク履修コース	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	1			1
	2026年10月	～	2027年3月	ボン大、ユトレヒト大	独・蘭	量子物理履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	1			1
	2026年10月	～	2027年3月	UGA、KUL	仏・白	生命・環境履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	1			1
	2026年5月	～	2026年12月	UGA	全ての大学	仏・独・白・蘭	数理・情報・生命融合セミナー	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	30		30
	2027年5月	～	2027年5月	UGA	全ての大学	仏・独・白・蘭	海外大学オンライン体験(留学前交流)	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	30		30
	2027年10月	～	2028年3月	UGA	フランス	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	6	6		
2027	2027年10月	～	2028年3月	ボーフム大	ドイツ	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	3	3		
	2027年10月	～	2028年3月	UGA	フランス	数理・情報・生命融合学際履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	3			3
	2027年10月	～	2028年3月	KUL	ベルギー	半導体・ナノテク履修コース	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	2			2
	2027年10月	～	2028年3月	ボン大、ユトレヒト大	独・蘭	量子物理履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2			2
	2027年10月	～	2028年3月	UGA、KUL	仏・白	生命・環境履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2			2
	2027年5月	～	2028年12月	UGA	全ての大学	仏・独・白・蘭	数理・情報・生命融合セミナー	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	30		30
	2028年5月	～	2028年5月	UGA	全ての大学	仏・独・白・蘭	海外大学オンライン体験(留学前交流)	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	30		30
	2028年10月	～	2029年3月	UGA	フランス	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	6	6		
	2028年10月	～	2029年3月	ボーフム大	ドイツ	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	3	3		
	2028年10月	～	2029年3月	UGA	フランス	数理・情報・生命融合学際履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	3			3
2028	2028年10月	～	2029年3月	KUL	ベルギー	半導体・ナノテク履修コース	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	2			2
	2028年10月	～	2029年3月	ボン大、ユトレヒト大	独・蘭	量子物理履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2			2
	2028年10月	～	2029年3月	UGA、KUL	仏・白	生命・環境履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2			2
	2028年5月	～	2028年12月	UGA	全ての大学	仏・独・白・蘭	数理・情報・生命融合セミナー	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	30		30

②外国人学生の受入【計画】

年度	交流期間		派遣元大学	派遣相手国	派遣先大学	交流内容 (交流プログラム名等)	交流形態	学生別	交流学生数	(内訳)		
										実渡航	オンライン	ハイブリッド
2024	2024年10月	～	2024年10月	全ての大学	仏・独・白・蘭	筑波大学	筑波大学オンライン体験(留学前交流)	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	15		15
	2024年10月	～	2025年3月	UGA	フランス	〃	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	4	4	
2025	2025年5月	～	2025年5月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	筑波大学オンライン体験(留学前交流)	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	30		30
	2025年10月	～	2026年3月	UGA	フランス	〃	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	4	4	
	2025年10月	～	2026年3月	ポーfum大	ドイツ	〃	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	2	2	
	2025年10月	～	2026年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	数理・情報・生命融合学際履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	1		
	2025年10月	～	2026年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	半導体・ナノテク履修コース	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	2		2
	2025年10月	～	2026年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	量子物理履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	1		1
	2025年10月	～	2026年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	情報理工履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2		2
	2025年10月	～	2026年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	生命・環境履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	1		1
	2025年5月	～	2025年12月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	数理・情報・生命融合セミナー	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	30		30
2026	2026年5月	～	2026年5月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	筑波大学オンライン体験(留学前交流)	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	30		30
	2026年10月	～	2027年3月	UGA	フランス	〃	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	5	5	
	2026年10月	～	2027年3月	〃	フランス	〃	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	2	2	
	2026年10月	～	2027年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	数理・情報・生命融合学際履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2		2
	2026年10月	～	2027年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	半導体・ナノテク履修コース	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	2		2
	2026年10月	～	2027年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	量子物理履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2		2
	2026年10月	～	2027年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	情報理工履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2		2
	2026年10月	～	2027年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	生命・環境履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2		2
	2026年5月	～	2026年12月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	数理・情報・生命融合セミナー	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	30		30
2027	2027年5月	～	2027年5月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	筑波大学オンライン体験(留学前交流)	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	30		30
	2027年10月	～	2028年3月	UGA	フランス	〃	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	6	6	
	2027年10月	～	2028年3月	ポーfum大	ドイツ	〃	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	3	3	
	2027年10月	～	2028年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	数理・情報・生命融合学際履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2		2
	2027年10月	～	2028年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	半導体・ナノテク履修コース	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	2		2
	2027年10月	～	2028年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	量子物理履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2		2
	2027年10月	～	2028年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	情報理工履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2		2
	2027年10月	～	2028年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	生命・環境履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2		2
	2027年5月	～	2028年12月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	数理・情報・生命融合セミナー	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	30		30
2028	2028年5月	～	2028年5月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	筑波大学オンライン体験(留学前交流)	④：上記以外の交流期間30日未満の交流	A	30		30
	2028年10月	～	2029年3月	UGA	フランス	〃	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	6	6	
	2028年10月	～	2029年3月	ポーfum大	ドイツ	〃	ダブルディグリープログラム	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	3	3	
	2028年10月	～	2029年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	数理・情報・生命融合学際履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2		2
	2028年10月	～	2029年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	半導体・ナノテク履修コース	③：単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	B	2		2
	2028年10月	～	2029年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	量子物理履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2		2
	2028年10月	～	2029年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	情報理工履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2		2
	2028年10月	～	2029年3月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	生命・環境履修コース	②：単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流	B	2		2
	2028年5月	～	2028年12月	全ての大学	仏・独・白・蘭	〃	数理・情報・生命融合セミナー	①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	B	30		30

(大学名：筑波大学)

(タイプ：

A)

⑥ 海外相手大学との単位互換について

(i) 単位互換を実施する海外相手大学数【計画】

(単位：校)

単位互換を実施する 海外相手大学数	2024年度		2025年度		2026年度		2027年度		2028年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
	1	1	2	5	4	5	5	5	5	5	17	21

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【計画】

学生別	A	学部生
	B	大学院生

【派遣する日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名： 筑波大学 】

相手大学名		学生別	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	2028 年度	合計
ゲルノーブル・アルプ大学(UGA)	認定者数	B	4	5	8	10	10	37
	認定単位数	B	24	28	42	52	52	198
ボーフム大学	認定者数	B		2	2	3	3	10
	認定単位数	B		12	12	18	18	60
ルーベン・カトリック大学(KUL)	認定者数	B			1	3	3	7
	認定単位数	B			4	12	12	28
ボン大学	認定者数	B			1	1	1	3
	認定単位数	B			4	4	4	12
ユトレヒト大学	認定者数	B				1	1	2
	認定単位数	B				4	4	8
年度別認定者数合計			4	7	12	18	18	59
年度別認定単位数合計			24	40	62	90	90	306

2. 国内連携大学 【大学名： 】

相手大学名		学生別	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	2028 年度	合計
	認定者数							0
	認定単位数							0
	認定者数							0
	認定単位数							0
	認定者数							0
	認定単位数							0
年度別認定者数合計			0	0	0	0	0	0
年度別認定単位数合計			0	0	0	0	0	0

⑦ 実渡航前のオンライン教育を実施する場合、そのオンライン教育を受けた学生数について

1. 代表申請大学 【大学名： 筑波大学】

交流プログラム名 (相手大学名)		分野	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	2028 年度	合計
ダブルディグリープログラム (UGA)	実渡航した学生	半導体・ナノ テク、量子物 理、情報理 工、生命・環 境	4	4	5	6	6	25
	上記の内、実渡航 前にオンライン教 育を受けた学生	半導体・ナノ テク、量子物 理、情報理 工、生命・環 境	0	4	5	6	6	21
ダブルディグリープログラム (ポーfum大)	実渡航した学生	半導体・ナノ テク、量子物 理、情報理 工、生命・環 境		2	2	3	3	10
	上記の内、実渡航 前にオンライン教 育を受けた学生	半導体・ナノ テク、量子物 理、情報理 工、生命・環 境		2	2	3	3	10
	実渡航した学生							0
	上記の内、実渡航 前にオンライン教 育を受けた学生							0
実渡航した学生数合計			4	6	7	9	9	35
上記の内、実渡航前にオンライン教育を受けた学生合計			0	6	7	9	9	31

2. 国内連携大学 【大学名：】

交流プログラム名 (相手大学名)		分野	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	2028 年度	合計
	実渡航した学生							0
	上記の内、実渡航 前にオンライン教 育を受けた学生							0
	実渡航した学生							0
	上記の内、実渡航 前にオンライン教 育を受けた学生							0
	実渡航した学生							0
	上記の内、実渡航 前にオンライン教 育を受けた学生							0
実渡航した学生数合計			0	0	0	0	0	0
上記の内、実渡航前にオンライン教育を受けた学生合計			0	0	0	0	0	0

(大学名： 筑波大学

)

(タイプ：

A

)

⑧ EU諸国等との大学との間で実施する協働/共修学習活動数について

	協働／共修学修活動 名称	開催年月	開催回数	参加人数	参加国
1	数理・情報・生命融合学際セミナー	2025年5月-12月	全3回	30	フランス
2	数理・情報・生命融合学際セミナー	2026年5月-12月	全3回	30	フランス
3	数理・情報・生命融合学際セミナー	2027年5月-12月	全3回	30	フランス
4	数理・情報・生命融合学際セミナー	2028年5月-12月	全3回	30	フランス
5					

(大学名：筑波大学

)

(タイプ：

A

)

⑨ 任意指標【2 ページ以内】					
【現状分析及び目標設定】					
(指標 1) ダブルディグリープログラムの参加学生数 (指標 2) 各分野の履修コースの参加学生数 (指標 3) 数理・情報・生命融合学際履修コースの参加学生数 (指標 4) 博士課程への内部進学率 (数理工学、システム情報工学、生命地球科学の 3 研究群)					
(設定指標)					
	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	2028 年度
(指標 1)	8	12	14	18	18
(指標 2)	0	8	15	19	19
(指標 3)	0	2	4	5	5
(指標 4)	13%	13%	14%	15%	16%
(指標 5)					
【計画内容】					
指標 1～3 については、本事業で設置する各交流プログラムに参加する学生数に係わる指標である。計画調書の(様式 2) ③、④の欄で述べた通り、各プログラムの設置当初は、コース当たり 1-2 名の参加を見込み、年度を経るに従って、参加学生を少しずつ増加させることを目指す。とりわけ、指標 3 の学際履修コースの参加学生数については、数理工学、情報、生命の融合分野の履修コースの立ち上げという新しい試みであり、設定した指標の達成のために精力を傾注する。 指標 4 の博士課程への内部進学率(但し数理工学、システム情報工学、生命地球科学の 3 研究群平均の数値)は参加学生の修士課程修了後の進路に係わる指標であり、本事業の交流プログラム参加による学生の学修・研究への意欲向上を測る意味で指標として設定した。指標として計算されるのは、3 研究群全体の数値であり、交流プログラムに参加学生に限定するものではないが、本事業の遂行により僅かずつでも増加することを目指す。					

⑩ 加点事項に関する取組【2 ページ以内】
【実績・準備状況】 本事業の相手大学とは、これまでも教員間の交流の実績が有り、特にグルノーブル・アルプ大学との間には複数の共同研究のチームが組まれており、また数理工学、情報の双方の分野でダブルディグリープログラムが設置されている。本事業は、今までの交流をさらに発展・深化させ、また他の相手大学との交流にも取り組み、欧州の有力大学と教育、研究両面の強固なネットワークを形成しようとするものである。
【計画内容】 ○将来の先端分野における国際共同研究や共同学位等の土台となるような、通常の大学間交流を超える総合的・互恵的な関係性を持つ海外相手大学との戦略的な国際ネットワークやパートナーシップを構築する計画となっているか。 本事業における相手大学の多くは、本学のスーパーグローバル事業において戦略的な国際ネットワーク構築を目指す Campus-in-Campus (CiC) 構想におけるパートナー校となっている。本事業によるこれらのパートナー校との先端工学分野の連携教育プログラムの設置・運営は、本学の国際ネットワークの更なる発展となる。グルノーブル・アルプ大学(UGA)の間では修士課程のダブルディグリープログラム(DDP)を既に設置済みであるが、本事業でその拡大を図り、ボーフム大学との間では来年度より DDP を開設する。このほかの大学との間でも本事業で各分野の履修コースを設置し、順調に推移すれば DDP に発展させる計画である。加えて、従来は別個に交流を行っていた半導体・ナノテク、先端材料などの数理工学分野、情報科学分野、及び生命・環境分野を融合した学際分野での交流プログラムを新たに設置するという計画は、海外大学との連携により融合領域の開拓を行うという点で、これまでに例のない取り組みと言える。 ○OEU 諸国等の大学等と、学生交流だけでなく積極的な教職員交流を実施する計画となっているか。 履修コースの設置、運営において、双方の大学の教員・職員が関わることにより、相互の交流を持つことが期待される。とりわけ、本事業で実施する共同特別講義は、本学と相手大学の教員が協力して開講し、一部の講義は教員が相手大学に赴いて講義をするように計画されている。このような海外渡航は、教員同士の相互交流の良い機会となり、両大学間の共同研究に繋がると期待される。 ○JV-Campus にコンテンツを提供する、もしくは他大学から提供されるコンテンツを有効活用する等、交流プログラムにおいて JV-Campus を積極的に活用する計画となっているか。 各分野およびナノテク、情報の融合領域の履修コースに設定される講義科目は、対面での講義を中心とするが、一部は JV-Campus を利用したオンライン受講を取り入れる。また各履修コースで講義される科目を録画し、JV-Campus のコンテンツとして提供する計画である。

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

○アウトカムに関する指標について、他大学の参考となる指標が設定されているか。

修士課程の留学により専門および融合分野の知識、経験を得た後、博士課程に進学して研究を進めて、専門および融合分野の技術革新を主導する人材となることを期待する。そのため、博士課程への内部進学率を一つの指標とする。また留学の効果を検証するため、BEVI-J などの分析ツールを導入し、留学の経験による学生の異分野適応力、主体性、モチベーションなどの種々の指標の変化を確認し、フィードバックすることにより、プログラムの改善に繋げる。

○国内連携大学・海外相手大学や機関等と協同し、学修歴やインターンシップ等の正課外の活動歴等のデジタル化、マイクロレデンシャルを進める計画となっているか。

海外、国内の大学で設置する履修コースは、複数の講義科目とインターンシップから構成され、履修により単位が与えられる仕組みとするが、一部の講義あるいはインターンシップのみの受講に対しても履歴を記録し、学生の受講記録を管理することにより、マイクロレデンシャル化する。一定の履修記録に基づき、修了証の発行などを行う。

○交流する相互の学生が、真の両国間の架け橋となる人材を目指し、双方の文化及び言語について高いレベルで習得する計画となっているか。

海外大学に派遣する学生については、学修に値する十分な英語力を有しているか確認すると共に、学類での講義ほかの英語力を向上させる機会を提供する。また留学前交流において、相手国の言語や文化に触れる機会を設ける。一方、海外から受入れる学生については、各自の希望に応じて、日本語学習コース受講の機会を提供すると共に、筑波大学、つくば市、他の民間団体の行う各種イベントへの参加を通じて、日本文化に触れる機会を提供する。

外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備【①～③合わせて3ページ以内】
① 日本人学生の派遣のための環境整備
【実績・準備状況】 ○本学の支援体制 本学では、海外派遣・受入の増加に伴って更なる支援体制を強化するため、2021年4月に組織再編によりスチューデントサポートセンターを設置し、日本人学生、外国人学生等を区別することなく、国際交流に関するワンストップサービスを提供している。 スチューデントサポートセンターでは、海外へ渡航する学生に向け、海外交流プログラムやイベントに関する情報、海外安全危機管理等の情報を集約して公開しているほか、海外経験を有する学生スタッフが対応する留学相談デスク、留学経験のある大学院生が英文書類作成サポートを行うライティング・ヘルプデスクなどを提供している。また、学生のための海外留学情報誌として『Go Abroad!』を作成し、積極的に情報収集を行うよう促している。 ○日本人学生の危機管理 学内の情報共有及び危機管理体制の強化を目的として、海外へ渡航する学生には「海外渡航システム（TRIP）」の入力を義務付け、緊急時の安否確認等の必要措置をよりスムーズに講じる体制が確立している。さらに、海外旅行傷害保険の加入義務付け、万が一の事件・事故等が発生した場合のサポートサービスである海外安全危機管理サービス（OSSMA）への加入も強く推奨している。これらを通じ、派遣中の学生の安否確認情報と外務省等から得られる海外安全情報、緊急アラート情報をリアルタイムで比較できるシステムを確立、安全管理体制を整備している。海外渡航が活発となる長期休業前も含め、海外安全、危機管理に関する教育啓蒙活動を毎年定期的の実施し、派遣中においては、本学の海外拠点や派遣先の協定校担当者を通じた現地サポートを実施している。 ○履修支援とキャリア支援 単位認定の手続きに関して、スチューデントサポートセンター及び各エリア支援室において情報提供を行っている。Campus-in-Campus 学生交流パートナー校については、科目ジュークボックスにおいて履修可能な科目を掲載しており、留学前に履修計画が立てやすい環境を整備している。また、授業科目として国外インターンシップを導入しており、日本人学生が指導教員の支援を受けながらインターンシップに参加できる仕組みが整えられている。
【計画内容】
○本学の支援体制 従来の体制に加えて、本プログラム専任のコーディネーターを配置することにより、一層充実した支援を行う体制を構築する。 ○派遣前～派遣中～派遣後 本プログラムでは派遣前に「海外大学オンライン体験」を実施することにより、相手大学の概要、教育・研究の特色、留学経験者の体験談などを紹介し、学生が留学を身近に感じるとともに留学への心理的障壁を低めることを目論む。 派遣中は、本学と相手大学の教職員が連携して学生をサポートすることで、派遣学生が安心してプログラムに専念できるように取り組む。また海外履修コースにおいては、派遣中に現地の研究機関等でのインターンシップに参加することにより、海外で就職する機運を高める。 派遣後は、本事業の交流プログラムに参加する／した学生を対象にしたネットワークを形成して、学生同士の交流を支援する。本学では留学生を対象とした“Tsukuba Alumni Network”が整備され、国・地域別、プログラム別の留学生コミュニティが形成されている。この仕組みを活用し、本事業の交流プログラムに参加する／した学生にネットワークへの加入を促し、学生同士の交流を促し、修了後の人的ネットワーク形成に役立てる。また、参加学生の博士後期課程進学を促すさまざまな働きかけを行う。
② 外国人学生の受入のための環境整備
【実績・準備状況】
○本学における支援体制 本学では、スチューデントサポートセンターを設置し、日本人学生、外国人学生等を区別することなく、国際交流に関するワンストップサービスを提供している。

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

スチューデントサポートセンターでは、本学への留学を希望する外国人学生に向け、学生種別の一般的な情報から入学後の生活全般に必要な情報を取りまとめ、「外国人留学生のための筑波大学入学案内」として、Web サイトで公表している。そのほか、経済支援や相談体制等についても Web サイトに掲載しているが、英語や中国語等 7 ヶ国語に翻訳可能であり、外国人学生が容易に欲しい情報へアクセスすることができる。また、学生宿舎への留学生の優先的な入居や、留学生と日本人学生のシェアハウス型の学生宿舎「グローバルヴィレッジ」の整備、短期留学・ショートステイ宿舎を運用し、日本人学生と留学生との交流の促進及び留学生の受入数拡大に対応し得る環境を整えている。

入学前の支援として、e ラーニングによる日本語学習機会の提供、在留資格認定証明書の代理申請や、来日後の宿舎入居手続や銀行口座開設等のサポート、留学生チューターによる学生生活を含む新生活立ち上げ全般に関するサポート、指導教員による修学全般のサポートなどを提供し、長期的な適応促進に努めている。

○在籍管理

渡日から修了までを各事務組織等が連携し、厳格な在籍管理を実施し、緊急時には常時対応できる体制を整備している。

○キャリア支援

ヒューマンエンパワーメント推進局による外国人留学生を含めたインターンシップの機会提供や、企業による就職ガイダンス・説明会、起業セミナーを開催し、日本での就職活動をサポートするとともに、帰国学生に対しては、海外拠点と連携した支援を行っている。

【計画内容】

○本学の支援体制

従来の体制に加えて、本プログラムの事務局を設け専任のコーディネーターを配置することにより、一層充実した支援を行う体制を構築する。

○在籍管理

本プログラムにおいて本学が受け入れる相手大学の学生は、適切な在籍管理のもとでプログラムに参加する。DDP へ入学する学生やインターンシップに参加する学生には、渡日前の説明により履修上の注意を理解してもらおうと共に、渡日から筑波大学での学修、帰国までの流れ、日本での生活、諸手続き、注意事項のガイダンスを行う。

○生活支援

渡日後は空港から大学キャンパス内への移動、学生宿舎への入居手続等の生活全般の支援を行うほか、必要に応じ日本人あるいはネイティブレベルの日本語運用能力を有する外国人学生をチューターとして配置し、キャンパス内での学修、生活のサポートを行う。

③ 関係大学間の連絡体制の整備

【実績・準備状況】

本事業の相手大学のうち、グルノーブル・アルプ大学(UGA)、ボーフム大学、ルーベン・カトリック大学(KUL)、ユトレヒト大学は本学の Campus-in-Campus (CiC) 構想のパートナー校であり、またボン大学も本学と学生交流の協定を締結しており、双方の大学の国際関係部署同士の連絡体制も整っている。加えて、本事業の関わる双方の大学の教員同士の連絡のチャンネルを有しており、交流プログラムの実施や学生の派遣・受入に伴うサポート体制に問題はない。

学生の海外派遣の際の安全対策・危機管理システムとしては、留学生危機管理サービス(OSSAMA)への加入に加えて、相手大学の国際関係部署および関係する教員との連絡体制が生まれ、万一の事故や災害時の支援を受けられる仕組みが整っている。

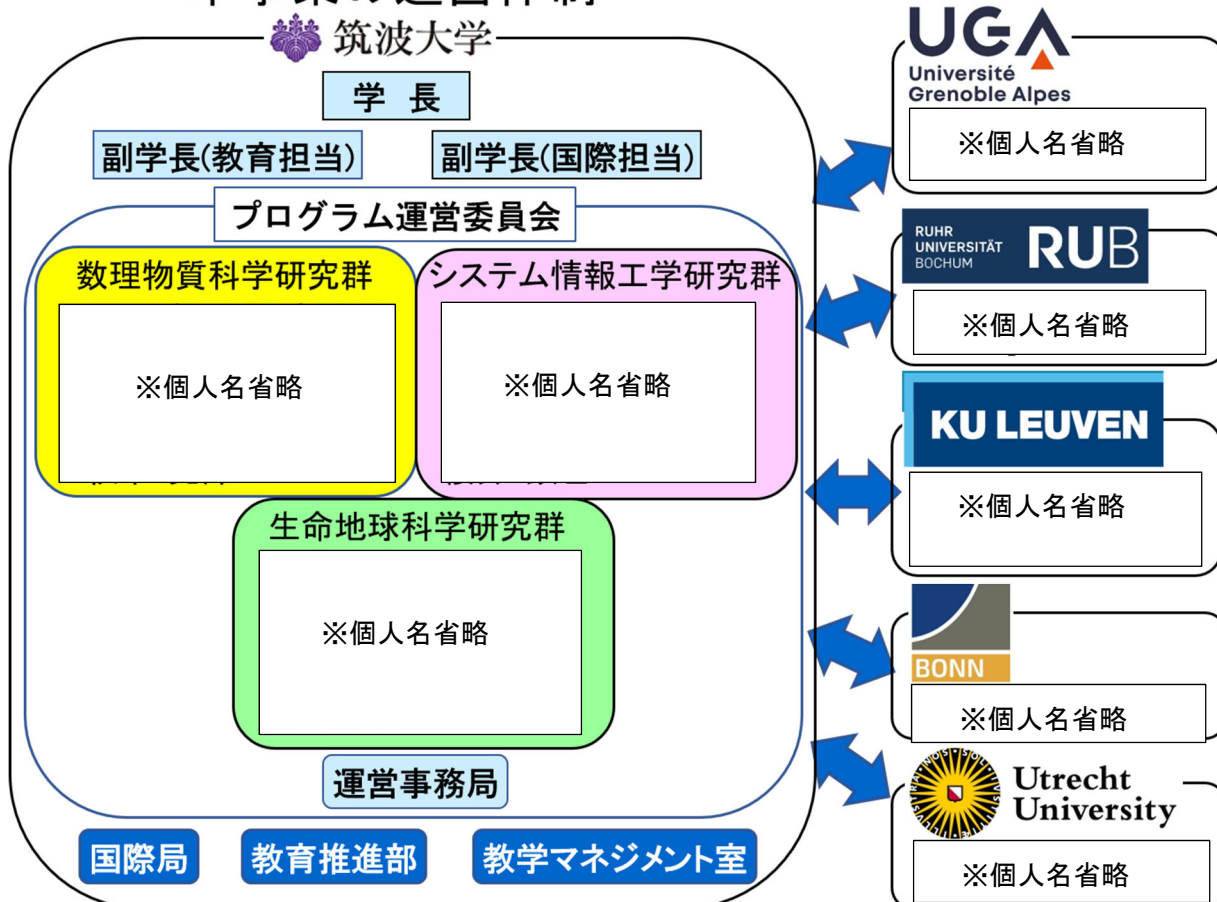
学生のネットワークについては、既に留学生の帰国後のオンライン上のネットワークとして“Tsukuba Alumni Network”が整備され、これを利用した国・地域別、プログラム別の留学生コミュニティが形成されている。今後はこれを基に、世界中の卒業生・修了生によるネットワークを発足させ、同窓生をはじめ、各種のステークホルダーに情報を発信し、また情報を収集する仕組みを構築していく予定である。

【計画内容】

本事業の遂行にあたっては、本学ならびに取組組織である数理物質科学、システム情報工学の両研究群が組織として関与する運営体制を構築する。本事業に係る両研究群の教員を中心としたプログラム運営委員会および事務局を発足させ、相手大学側の担当教員ならびに国際関係の部局との緊密な協力の下、本事業を運営する。(運営体制の概念図を次ページに示す。)

交流プログラムに参加する／した学生に対しては、上記の国際ネットワークへの加入を促し、海外生活の際の学生間の情報交換や、修了後の人的ネットワーク形成に役立てる。

本事業の運営体制



(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

プログラムの実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及【①、②合わせて2ページ以内】
① プログラムの実施に伴う大学の国際化
【実績・準備状況】
○国際性のある事務体制 本学では、日本人学生と留学生が日常的に国際交流する場である「スチューデント・コモンズ」を中心に、学生の国際交流活動、留学希望者への相談及び情報提供等の支援を行っている。また、2021年4月にはスチューデントサポートセンターを新たに設置し、学生支援、学生相談及び国際交流に係る支援の窓口を一元化する体制を強化した。さらに、全てのエリア支援室にエリア・コモンズ（教育・研究のグローバル化を担当する事務職員）を配置し、部局のグローバル化の支援を行っている。2020年度には全学事務組織に翻訳支援ツールを導入し、文書の日英二言語化のさらなる促進を図った。 ○Campus-in-Campus 構想の推進 Campus-in-Campus (CiC) 構想は、海外のパートナー大学との間でキャンパス機能を共有し、国境や機関の壁を越えたトランスボーダーな教育研究交流を実現する取組で、2024年5月現在13校の海外大学と協定を締結している。本プログラムの欧州相手大学とも一部を除き CiC 協定を締結しているが、今回の事業を契機に更なる連携強化を図るよう調整している。
【計画内容】
○本学の国際化戦略に対する本プログラムの意義 本学は第四期中期計画において、「本学または海外大学の単位取得を伴う海外留学（武者修行プログラム等）を行う学生を令和9（2027）年度末までに2,000人／年にする（オンラインによる履修を含む）」ことを掲げている。本プログラムは、オンライン履修、実渡航を合わせて2027年度までに200余人程度の日本人学生の海外交流を見込んでいることから、大学の国際化戦略達成に向けた貢献が期待できる。 ○プログラム事務局の設置 本プログラムに事務局を設置し、語学力に優れた専任の職員を配置する。事業開始と合わせて、専任コーディネーターに相当する人材を登用することにより、プログラム全体のブラッシュアップ及び海外相手大学との連携を強化する。他方、学内部局とも協力し、既存業務を抱える特定の職員に業務が偏ることのないように配慮する。 ○JV-Campus へのコンテンツ提供 海外相手大学と共同でオンライン開講する「共同特別講義」のコンテンツを提供することにより、他大学の学生も本プログラム的一端に触れられるような仕組みを構築する。

(大学名：筑波大学) (タイプ：A)

② 国内外への情報提供の方法・体制、成果の普及

【実績・準備状況】

○過去の世界展開力強化事業に関する情報発信

前提として、本学の教育研究活動、国際交流活動の取組は、本学の Web サイトや公式 SNS 等も活用し、国内外のステークホルダーに向け、日本語及び英語で情報発信を行っている。

2023 年度に採択された本学の Inclusive Smart Society プログラムについては、専用の Web サイトを設け積極的に情報発信を行っており、パートナー大学の OSU 関係者も情報を得られるように日英対応となっている。Web サイトでは、各年度の活動報告や学生・教員の声を掲載しており、具体的な実施状況を公開している。



○Tsukuba Global Science Week (TGSW)における学外関係者への情報発信

筑波大学では、多岐にわたる学術分野の最先端の研究成果を共有し、より良い未来を実現するための方策を議論する場として、Tsukuba Global Science Week (TGSW)を開催している。TGSW では、学生主体のセッションも毎年開催されており、例えば本学学生と国立台湾大学(Campus-in-Campus パートナー)の学生が SDGs をテーマに議論を行った。



なお、中央教育審議会ワーキンググループが掲げる公表が望まれる項目については、年次報告書を中心に公表している。

【計画内容】

○日常的な情報発信

本プログラムの情報発信にあたっては、専用の Web サイトを立ち上げ、プログラム概要や活動報告、参加した学生等の声を掲載することにより、プログラムへの参加を検討している学生が適切に判断できるようにする。また、本学の広報局とも連携し、SNS 等も活用して積極的な情報発信を展開することで、学内外へプログラムの成果を広く普及させる。

○TGSW 等の成果発表会による情報発信

筑波研究学園都市にある本学の優位性を十二分に生かした成果発表の場として、つくばグローバルサイエンスウィーク(TGSW)において学生自らが企画するワークショップを実施し、本事業の成果を発信する。当該イベントは国内外から多数の研究者・学生が集うものであり、本プログラムの成果を日本のみならず、海外にも広く発信し、普及させることが可能であると考え。

交流プログラムを実施する海外相手大学について【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】																																																																																																	
相手大学名 (国名)				グルノーブル・アルプ大学 (フランス)																																																																																													
① 交流実績 (交流の背景)																																																																																																	
本学とグルノーブル・アルプ大学(UGA)は2002年に、数理物質系分野での部局間国際交流協定による国際交流を開始。2013年11月には、それまでの交流実績に基づいて、全学協定が締結され、同月、つくば市においては、科学技術拠点都市として包括的な連携を図るため、グルノーブル市と姉妹都市協定が締結され、官・学一体による都市間交流が幕を開けた。2017年には、UGAとCiC国際交流協定を締結。この協定に基づき、2022年3月に、UGAキャンパス内に筑波大学海外オフィスを設立。各分野において教育・研究・職員交流に係る活発な交流を続けてきた。以下にその一例を示す。 【全体】Strategic Committee Meetingを年2回開催、5か年(2020-24)の活動目標であるStrategic Noteを作成し、各交流分野の活動状況を報告している。2023年10月に、UGAとの長年に渡る研究功績により、秋本特命教授が名誉博士号を授与されている。同月の創基151周年創立50周年記念式典では、主賓のUGA学長に開会時の祝辞をいただくなど親密な関係を築いている。 【J-FAST/物質工学】J-FASTはフランス国立科学研究機関(CNRS)が筑波大学(UT)に設置した海外研究拠点で、CNRS、UGA、UT、およびエア・リキッド社間の共同研究プロジェクトとして2022年に発足。2023年7月にワークショップとセミナー、同9月に第2回ジョイントワークショップを開催。UGAからDDPの学生、ポスドク、研究者を受け入れており、研究者による夏・冬期集中講義を実施している。 【CS】2022年9月にDDPプログラムを開設。2024年に2名の受け入れを予定している。2023年夏に教員1名をUGAに1か月派遣したほか、UGAから2名の研究者を招聘した。また、12月にはUT-UGA-RUBオンラインワークショップを開催した。2024年夏に、3名の短期研修生、同秋には、少なくとも1名の交換留学生の受け入れが決定している。 【学生交流】UGAとの間に5つのDDP(数学、物理学、化学、応用理工学、国際マテリアルズイノベーション学)を設置。2023年度の実績は、DDPでは4名の受入れ、3名の派遣。特別聴講学生として6名を受け入れ、4名を派遣。特別研究学生として3名を派遣した。 【人文科学】2023年9月に開催された筑波会議においてUGAから9名の研究者を招聘し、オンサイトのセッションを実施した。その後、2024年3月に、教員2名がUGAを訪問し、ハイブリッドワークショップを開催。今後も隔月でのオンラインワークショップを予定している。 【リスク】2023年12月から2024年3月にかけて、Risk Webinarを3回実施。テーマ別に双方の研究者が発表を行った。第4回目のRisk Webinarを企画中である。 【化学】2023年3月にDDPプログラムを開設。2024年5月に交換留学生(修士)を受け入れ。2019年及び2024年に、TSSPプログラムにて複数名の学生を受け入れた。 【職員交流】2021年12月、2024年2月にオンライン職員交流会を実施した。																																																																																																	
<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">2018年度</th> <th colspan="4">2019年度</th> <th colspan="4">2020年度</th> <th colspan="4">2021年度</th> <th colspan="4">2022年度</th> </tr> <tr> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> </tr> <tr> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>19</td> <td>18</td> <td>30</td> <td>14</td> <td>21</td> <td>35</td> <td>10</td> <td>15</td> <td>3</td> <td>15</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>4</td> <td>0</td> <td>5</td> <td>15</td> <td>8</td> <td>27</td> <td>5</td> </tr> </tbody> </table>																		2018年度				2019年度				2020年度				2021年度				2022年度				受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	19	18	30	14	21	35	10	15	3	15	0	2	3	4	0	5	15	8	27	5
2018年度				2019年度				2020年度				2021年度				2022年度																																																																																	
受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣																																																																															
教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生																																																																														
19	18	30	14	21	35	10	15	3	15	0	2	3	4	0	5	15	8	27	5																																																																														
② 交流に向けた準備状況																																																																																																	
上述の通り、グルノーブル・アルプ大学(UGA)は本学との間で長年に亘り強力かつ多分野に及ぶ連携を行っており、本学のCampus-in-Campus(CiC)構想のパートナー校として重要な位置を占めている。本申請にあたっては、UGAの数理物質分野のProf. Etienne Gherraert(現、副学長)、Prof. Marceline Bonvalotならびにコンピューターサイエンス分野のProf. Lydie du Bousquetおよび国際担当部署と打合せを行い、本事業における交流の相手大学となることの了解を得ている。さらに交流プログラムの内容を協議し、以下の点を確認している。 ● 現行のナノサイエンス、ナノケミストリー、コンピューターサイエンスの3コースのダブルディグリープログラムを継続して実施する。参加学生数を増やす方策を検討する。 ● オンラインで互いの大学を紹介するイベント(留学前交流)を実施する。 ● 数理物質、情報、生命分野の融合領域の学修を行う履修コースを設置する。 ● 数理物質、情報、生命分野の融合領域の研究紹介を行うオンラインセミナーを新たに始める。 本事業の開始が決定した暁には、計画した交流プログラムがすみやかに実施できるよう、改めて協議を行う。																																																																																																	

(大学名：筑波大学) (タイプ：A)

交流プログラムを実施する海外相手大学について【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】																																																																																																	
相手大学名 (国名)	ボーフム大学 (ドイツ)																																																																																																
① 交流実績 (交流の背景)																																																																																																	
2007 年の本学システム情報工学研究科とボーフム大学地理学研究所による部局間協定の締結を皮切りに、2016 年の全学協定締結、2019 年の Campus in Campus 協定締結と、両学の交流は理想的な拡大を見せている。加えて、本学山海嘉之教授が代表を務める CYBERDYNE 社の欧州拠点である Cyberdyne Care Robotics 社のボーフム市内への設立 (2013 年)、両学の交流実績をもとにしたつくば市とボーフム市による科学技術分野における連携合意締結 (2019 年)、本学相澤啓一名誉教授 (前本学ボンオフィス運営責任者/前ケルン日本文化会館館長) によるボーフム市名誉メダル受賞 (2022 年)、VfL ボーフム (ドイツ・ブンデスリーガ 1 部フットボールチーム) と本学スポーツ局との連携協定締結 (2024 年予定) など、両学の良好な協力関係が、大学間の枠組みを超えた交流にも発展している。2023 年には CiC 協定に基づきボーフム大学内に本学ボーフムオフィスが設置され、一層の交流推進が期待される。これまでの個々の交流事例は以下のとおり。 【都市計画分野における研究交流】ボーフム大学 Uta Hohn 教授と本学大村謙二郎名誉教授、藤井さやか准教授らによる都市計画分野での長年の共同研究が行われており、国際交流ワークショップの開催等により、日独間の学生のモビリティも積極的に推進されている。当該研究交流実績や、ボーフム大学副学長としての活動により、日本・ドイツ間の学術交流及び相互理解の促進に寄与したことを理由に、Hohn 教授は 2024 年に旭日中綬章を授与されている。 【プラズマ研究分野における研究交流】ボーフム大学 Uwe Czarnetzki 教授と、本学上殿明良教授 (ボーフムオフィス運営責任者)、坂本瑞樹教授らによるプラズマ研究分野での共同研究が実施されている。2019 年には、本学が DAAD (ドイツ学術交流会) と共同で実施しているファンディングプログラムである筑波大学・DAAD パートナシッププログラムに、当該共同研究が採択されている。 【情報学分野におけるダブルディグリープログラム開設予定】ボーフム大学 Tobias Glasmachers 教授、Karola Marky 教授と本学天笠俊之教授らを中心として、情報学分野のダブルディグリープログラムの開設に係る調整が進められている。 【ボーフム大学図書館における国際インターンシップ実施】ボーフム大学 Katja Schmidtpott 教授と本学原淳之助教授らの協力関係により、ボーフム大学図書館において、本学の知識情報・図書館学類が開講している「国際インターンシップ」という科目の受講学生の受け入れが行われている。 【執行部による交流】2017 年、2018 年、2022 年、2023 年の本学永田学長によるボーフム大学訪問、2018 年のボーフム大学 Axel Schölmerich 前学長による本学訪問、2023 年のボーフム大学 Martin Paul 現学長による本学訪問等、執行部間の交流も定期的に行われている。 《参考》過去の交流実績 <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">2018年度</th> <th colspan="4">2019年度</th> <th colspan="4">2020年度</th> <th colspan="4">2021年度</th> <th colspan="4">2022年度</th> <th colspan="4">5年間合計</th> </tr> <tr> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> </tr> <tr> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>5</td> <td>16</td> <td>20</td> <td>12</td> <td>13</td> <td>11</td> <td>8</td> <td>15</td> <td>1</td> <td>3</td> <td>0</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>4</td> <td>7</td> <td>11</td> <td>4</td> <td>23</td> <td>38</td> <td>39</td> <td>32</td> </tr> </tbody> </table>		2018年度				2019年度				2020年度				2021年度				2022年度				5年間合計				受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	5	16	20	12	13	11	8	15	1	3	0	1	0	1	0	0	4	7	11	4	23	38	39	32
2018年度				2019年度				2020年度				2021年度				2022年度				5年間合計																																																																													
受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣																																																																											
教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生																																																																										
5	16	20	12	13	11	8	15	1	3	0	1	0	1	0	0	4	7	11	4	23	38	39	32																																																																										
② 交流に向けた準備状況																																																																																																	
上述の通り、ボーフム大学は本学との間で主として情報科学分野を中心に長年に亘る連携を行っており、本学の Campus-in-Campus (CiC) 構想のパートナー校として重要な位置を占めている。本申請にあたっては、ボーフム大学の Prof. Tobias Glasmachers および国際担当部署と打合せを行い、本事業における交流の相手大学となることの了解を得ている。さらに交流プログラムの内容を協議し、以下の点を確認している。 - 来年度よりコンピューターサイエンスのダブルディグリープログラムを開設し、学生の派遣、受入れを行う。実施にあたっては参加学生数を増やす方策を検討する。 - オンラインで互いの大学を紹介するイベント(留学前交流)を実施する。 本事業の開始が決定した暁には、計画した交流プログラムがすみやかに実施できるよう、改めて協議を行う。																																																																																																	

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

交流プログラムを実施する海外相手大学について【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】																																																																																																													
相手大学名 (国名)		ルーベン・カトリック大学 (ベルギー)																																																																																																											
① 交流実績 (交流の背景)																																																																																																													
2011年5月、両大学は数理工学分野での部局間協定を締結し、教員及び大学院学生を中心に研究交流を推進した。2018年4月に全学協定を締結することにより、上記協定を両大学の全ての部局、機関の交流へ拡大した。2022年8月には、本学の学長らがルーベン・カトリック大学を訪問、CiCについて説明を実施した。また、2023年4月、ルーベン・カトリック大学・副学長らが本学を訪問し、さらに両校が連携を強化することを確認した。同年、両大学は研究を中心とするCiCリサーチパートナーとして交流協定を締結した。																																																																																																													
<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">2018年度</th> <th colspan="4">2019年度</th> <th colspan="4">2020年度</th> <th colspan="4">2021年度</th> <th colspan="4">2022年度</th> <th colspan="4">5年間合計</th> </tr> <tr> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> </tr> <tr> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>5</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>2</td> <td>0</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>2</td> <td>9</td> <td>0</td> <td>7</td> <td>4</td> <td>14</td> <td>2</td> </tr> </tbody> </table>														2018年度				2019年度				2020年度				2021年度				2022年度				5年間合計				受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	5	0	3	0	0	0	2	2	0	1	0	0	0	1	0	0	2	2	9	0	7	4	14	2
2018年度				2019年度				2020年度				2021年度				2022年度				5年間合計																																																																																									
受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣																																																																																							
教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生																																																																																						
5	0	3	0	0	0	2	2	0	1	0	0	0	1	0	0	2	2	9	0	7	4	14	2																																																																																						
② 交流に向けた準備状況																																																																																																													
上述の通り、ルーベン・カトリック大学(KUL)は本学との間で主として半導体およびナノテクノロジーの分野で連携を行っており、本学と学生交流協定を締結し、学生および教員の相互交流を行っている。本申請にあたっては、KULのProf. Claudia Fleischmann, Prof. Christoph Adelman, Prof. Hideaki Mizuno および国際担当部署と打合せを行い、本事業における交流の相手大学となることの了解を得ている。さらに交流プログラムの内容を協議し、以下の点を確認している。 - オンラインで互いの大学を紹介するイベント(留学前交流)を実施する。 - 半導体・ナノテク分野の履修コースを設置し、学生の派遣、受入れを実施する。 - 生命・環境分野の履修コースを設置し、学生の派遣、受入れを実施する。 - KUL と密接な協力関係にある大学間マイクロエレクトロニクス研究センター(IMEC)において学生のインターンシップを受入れる。 本事業の開始が決定した暁には、計画した交流プログラムがすみやかに実施できるよう、改めて協議を行う。 また、全学の動きとして、学生交流に人数制限を設けないCiCパートナー協定を両大学で締結する予定である。加えて、本学独自のプログラムである「海外教育研究ユニット招致プログラム」を用いて、ルーベン・カトリック大学の研究室を本学に設置、融合的な研究交流、学生交流を行うことを検討中である。																																																																																																													

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

交流プログラムを実施する海外相手大学について【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】																																																																																																	
相手大学名 (国名)				ボン大学 (ドイツ)																																																																																													
① 交流実績 (交流の背景)																																																																																																	
本学は、2009 年に本学 5 番目の海外拠点として筑波大学ボン事務所を開設したのを機に、2011 年に研究・教育両面における全面的交流を推進するためにボン大学と国際交流協定を締結した。以後、本学ボン事務所による支援と共に、人文・社会科学分野を中心に、本学の多様な分野において研究・教育両面における活発な全面的交流を続けてきた。以下にその一例を示す。 【人文社会科学分野における交流】 2011 年、本学教員とボン大学教員が日独交流 150 周年の一環として、NHK ラジオ・ドイツ語講座で日独交流を扱うシリーズ番組を共同制作した。2015 年には、本学芸術系の学生が製作した映画「いわきノート」(2014 年製作)の上映会・討論会をボン大学で開催するとともに、ボン大学内日本学科において同映画のドイツ語字幕作成プロジェクトが進められた。 【2011 年度大学の世界展開力強化事業・日独韓共同修士課程 (TEACH) プログラム】「人社系グローバル人材養成のための東アジア・欧州協働教育推進プログラム」が採択され、2011～2015 年度までの 5 年間にわたり、ボン大学と筑波大学の短期学生交流を行った。そのうちの 1 つの柱となった「日独韓共同修士課程 (TEACH) プログラム」は、筑波大学 (日本)、ボン大学 (ドイツ)、高麗大学 (韓国) の 3 大学が共同で運営する人文社会科学分野の大学院生 (博士前期課程) のためのダブルディグリープログラムであったが、当事業終了後も自走し継続している。2014 年 3 月の開始以降、本学固有の留学システムとして機能し、ボン大学と筑波大学の交流の大きな成果を上げているだけでなく、本学大学院教育の充実と国際化の推進に貢献している。 【共同ワークショップ開催】医学分野、システム情報分野、体育学分野における本学とボン大学による共同ワークショップをこれまでに 3 回開催し、本学教員が基調講演を行っている。 【執行部による交流】2015 年に本学学長がボン大学学長を訪問。2017 年、2022 年はボン大学学長が本学学長を訪問している。 【海外拠点】2009 年以降、ボン事務所を設置し、職員を派遣。ボン大学内の留学イベントへの参加や本学留学予定の学生への説明会を行うなど、学生・教職員の派遣のサポートを積極的に行ってきた。なお、当事務所は、設置当初はドイツ学術交流会 (DAAD) ボン本部内にあったが、2014 年には SPS ボン研究連絡センターと同じ建物内に移転し、同センターとドイツにおける学術交流について密接な情報交換を行ってきた。(2023 年 3 月に閉鎖。) 《参考》過去の交流実績 <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">2018年度</th> <th colspan="4">2019年度</th> <th colspan="4">2020年度</th> <th colspan="4">2021年度</th> <th colspan="4">2022年度</th> </tr> <tr> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> </tr> <tr> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>4</td> <td>18</td> <td>2</td> <td>8</td> <td>2</td> <td>12</td> <td>2</td> <td>7</td> <td>1</td> <td>4</td> <td>0</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>0</td> <td>1</td> <td>9</td> <td>9</td> <td>8</td> <td>3</td> </tr> </tbody> </table>																		2018年度				2019年度				2020年度				2021年度				2022年度				受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	4	18	2	8	2	12	2	7	1	4	0	1	1	2	0	1	9	9	8	3
2018年度				2019年度				2020年度				2021年度				2022年度																																																																																	
受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣																																																																															
教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生																																																																														
4	18	2	8	2	12	2	7	1	4	0	1	1	2	0	1	9	9	8	3																																																																														
② 交流に向けた準備状況																																																																																																	
上述の通り、ボン大学は本学との間で広く連携を行っており、本学と学生交流協定を締結し、学生および教員の相互交流を行っている。本申請にあたっては、ボン大学の Prof. Christian Kloeckner および国際担当部署と打合せを行い、本事業における交流の相手大学となることの了解を得ている。さらに交流プログラムの内容を協議し、以下の点を確認している。 - オンラインで互いの大学を紹介するイベント (留学前交流) を実施する。 - 量子物理分野の履修コースを設置し、学生の派遣、受入れを実施する。 - ボン大学が拠点校として実施しているドイツ国内の量子技術の卓越研究ネットワーク “Matter and Light for Quantum Computing” (ML4Q) のプログラムに学生を受入れる。 本事業の開始が決定した暁には、計画した交流プログラムがすみやかに実施できるよう、改めて協議を行う。																																																																																																	

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

交流プログラムを実施する海外相手大学について【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】																																																																																																		
相手大学名 (国名)	ユトレヒト大学 (オランダ)																																																																																																	
① 交流実績 (交流の背景)																																																																																																		
ユトレヒト大学と本学は、1996 年より部局間協定を締結し、現在は3部局での協定、全学の CiC 協定を締結しており、様々な分野で交流を続けている。 (法学) 1996 年より部局間協定を締結している。新型コロナウイルスの感染拡大前は、毎年のように学生派遣・受入を行っており、何れの学生も極めて高い学習効果を挙げて帰国している。 (体育学) 2016 年より部局間協定を締結している。2018 年 2 月には、国際連携教育事業 (Global Master's Programme on Sport for Development: GMP) ユトレヒト・ラウンドが開始され、教職員 3 名、学生 3 名を派遣し、同年 7 月には、ユトレヒト大学から教員 2 名学生 5 名を受け入れて、およそ一か月にわたって GMP つくば・ラウンドを実施した。その後、ユトレヒト大学の教員が外国人受託研究員として本学に 1.5 ヶ月間滞在し、共同研究を行った。 (物理) 2018 年より部局間協定を締結している。2014～2022 年においては、CERN 研究所の PS/SPS 加速器のテストビームラインを使った FoCal 検出器の性能評価実験を、筑波大・ユトレヒト大の合同チームによって計5回(各約1ヶ月間)、実施した。また 2019 年には、FoCal 開発を行うため、本学の大学院生 4 名、学類生1名を 1 ヶ月ユトレヒト大に派遣し、共同研究を行った。2017 年度より本学独自の海外教育研究ユニット招致プログラムを実施し、ユトレヒト大学より PI 及び副 PI の教授を迎え、共同研究を推進している。その結果、FoCal プロジェクトは CERN LHC プログラムの正式プロジェクトとして承認され、FoCal プロジェクト共同代表(中條)を務めるに至った。日本では本研究に関する大型科研費を獲得した(基盤研究(S)「LHC 超前方光子測定によるグルーオン飽和と QGP 生成起源」(代表・中條、2020-2024)、特別推進研究「ALICE FoCal 実験で拓く新しい量子色力学と宇宙初期物質 QGP 誕生の謎」(代表・中條、2024-2030))。																																																																																																		
② 年度別交流実績																																																																																																		
<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">2018年度</th> <th colspan="4">2019年度</th> <th colspan="4">2020年度</th> <th colspan="4">2021年度</th> <th colspan="4">2022年度</th> <th colspan="4">5年間合計</th> </tr> <tr> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> <th colspan="2">受入</th> <th colspan="2">派遣</th> </tr> <tr> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> <th>教職員</th> <th>学生</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2</td> <td>7</td> <td>0</td> <td>5</td> <td>2</td> <td>2</td> <td>5</td> <td>7</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>7</td> <td>10</td> <td>6</td> <td>18</td> </tr> </tbody> </table>		2018年度				2019年度				2020年度				2021年度				2022年度				5年間合計				受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	2	7	0	5	2	2	5	7	1	0	0	2	1	0	0	2	1	1	1	1	2	7	10	6	18
2018年度				2019年度				2020年度				2021年度				2022年度				5年間合計																																																																														
受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣		受入		派遣																																																																												
教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生																																																																											
2	7	0	5	2	2	5	7	1	0	0	2	1	0	0	2	1	1	1	1	2	7	10	6	18																																																																										
② 交流に向けた準備状況																																																																																																		
上述の通り、ユトレヒト大学は本学との間で主として法学、体育学、物理学の分野で長年に亘る連携を行っており、本学の Campus-in-Campus (CiC) 構想のパートナー校として重要な位置を占めている。本申請にあたっては、ユトレヒト大学の Prof. Thomas Peitzmann および国際担当部署と打合せを行い、本事業における交流の相手大学となることの了解を得ている。さらに交流プログラムの内容を協議し、以下の点を確認している。 - オンラインで互いの大学を紹介するイベント(留学前交流)を実施する。 - 量子物理分野の履修コースを設置し、学生の派遣、受入を実施する。 本事業の開始が決定した暁には、計画した交流プログラムがすみやかに実施できるよう、改めて協議を行う。																																																																																																		

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

プログラム計画の実現性、プログラムの発展性、交流プログラムの質の向上のための評価体制【①は1ページ以内、②～④は合わせて3ページ以内】
① 年度別実施計画
【2024 年度（申請時の準備状況も記載）】
◎ 準備状況 ・ 本事業の取組組織(数理解物質科学、システム情報工学、生命地球科学の各研究群)の教員、相手大学と交流実績のある教員による本事業の申請、実施内容の打合せ、学内関係組織(教育推進部、国際局)との意見交換 ・ 相手大学の窓口となる教員との打合せ、各種交流プログラムの実施計画検討 ◎ 実施計画 ・ 本事業の実施体制(運営委員会、事務局)の確立 ・ 本事業のホームページの制作、公開 ・ 相手大学の教員による実施計画の詳細について打合せ(対面 and/or オンライン) ・ 留学前オンライン交流の実施 ・ グルノーブル・アルプ大学(UGA)とのダブルディグリープログラム(DDP)の実施 ・ ボーフム大学との DDP 設置の準備 ・ 数理・物質・生命融合の学際履修コース、数理・情報・生命融合セミナー開設の準備 ・ 共同特別講義開設の準備
【2025 年度】
・ 留学前オンライン交流の実施 ・ UGA との DDP の実施 ・ ボーフム大学との DDP の開設、学生の派遣、受入開始 ・ 数理・物質・生命融合の学際履修コースの開設、学生の派遣、受入開始 ・ 数理・情報・生命融合セミナー、共同特別講義の開設 ・ ルーベン・カトリック大学、ボン大学、ユトレヒト大学への各分野の履修コース、および筑波大学における履修コース開設の準備
【2026 年度】
・ 中間評価結果に基づき、交流プログラムの内容を再検討 ・ 留学前オンライン交流の実施 ・ UGA、ボーフム大学との DDP の実施 ・ 数理・物質・生命融合の学際履修コースにおける学生の派遣、受入 ・ 数理・情報・生命融合セミナー、共同特別講義の実施 ・ ルーベン・カトリック大学、ボン大学、ユトレヒト大学への各分野の履修コースの開設、学生の派遣開始 ・ 筑波大学における履修コースの開設、学生の受入開始
【2027 年度】
・ 留学前オンライン交流の実施 ・ UGA、ボーフム大学との DDP の実施 ・ 数理・物質・生命融合の学際履修コース、および各分野の履修コースにおける学生の派遣、受入 ・ 数理・情報・生命融合セミナー、共同特別講義の実施 ・ 学際および各分野の履修コースの実施状況(参加学生数など)を見て、DDP 開設について検討
【2028 年度】
・ 前年度と同様の各交流プログラムの実施 ・ 学際および各分野の履修コースについて、前年度の検討結果により、DDP を開設 ・ 5 年間の事業総括と補助期間終了後の実施計画の検討

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

② 交流プログラムの質の向上のための評価体制
○ステークホルダーからの意見聴取等を持ちいた質向上サイクル 本事業のそれぞれの交流プログラムについて、本事業の運営委員会において毎年の評価を行う。その際、交流プログラムの実施計画、実施状況、目標達成度を検証する。参加学生をはじめとする各種ステークホルダーの意見を収集、反映し、さらに留学の効果を客観的に判定するため、Beliefs, Events, and Values Inventory in Japan (BEVI-J)などのツールを活用する。これらの評価においては、相手大学の教員、事務局とも協力する。また本事業の実施全体については、本学の大学・大学院教育全般を統括する「教学マネジメント室」の評価も反映させ、実施内容にフィードバックする。さらに、交流プログラムに参加した学生の課程修了の年度に達したら、修了後の進路についても調査し、交流プログラムの影響を検討、フィードバックする。
③ 補助期間終了後のプログラム展開
○本事業モデルの他の海外大学への展開 本学は、第4期中期目標計画において、筑波大生の海外派遣、留学生の受入とも、量的に拡大することを目指している。本事業においては、本学がこれまで交流実績のある Campus-in-Campus (CiC) パートナー校および交流協定校の中から5つの大学を選んで交流の相手としている。本事業において、これらの相手大学と交流プログラムの構築・運営で良い成果を出すことができれば、それをモデルとして他の協定校にも拡大する。これにより、より多くの学生の派遣、受入を行い、海外交流の量的拡大が期待できる。
④ 補助期間終了後のプログラム展開に向けた資金計画
○学内の海外派遣支援事業の活用 本学独自の事業として給付型支援制度「はばたけ！筑大生」を実施しており、海外留学・短期研修する本学の学生を独自に支援している。本事業を補助期間終了後も継続させるため、この制度の経済支援を活用する。もともと本事業の予算内では、実際の渡航を伴う交流プログラムの学生への支援は限られたものとならざるを得ず、補助期間内においても本制度への応募を推奨し、より学生が海外渡航の機会が得られるようにする。 ○外部団体の支援制度の活用 上に述べた学内の支援制度のほか、日本学生支援機構(JASSO)の海外留学支援制度などの外部団体の支援制度を積極的に活用し、海外渡航学生への支援の継続に努める。

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

海外相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】						
① 交流プログラムを実施する相手大学の概要						
大学名称	(日)	グルノーブル・アルプ大学	国名	フランス		
	(英)	Grenoble Alpes University				
設置形態	Public		設置年	1339		
設置者（学長等）	Yassine Lakhnech					
学部等の構成	Department/Division : Drome-Ardèche Sciences (DSDA), Department/Division : Science and Technology, Faculty : Arts and Humanities, Faculty : Chemistry-Biology, Faculty : Computer Science, Mathematics and Applied Mathematics, Faculty : Economics, Faculty : Foreign Languages, Faculty : Humanities and Social Sciences (SHS), Faculty : Languages, Literature, Performing Arts, Information and Communication (LLASIC), Faculty : Law, Faculty : Medicine, More details: La Tronche, Faculty : Pharmacy, More details: La Tronche, Faculty : Physical Education and Sport (STAPS), Faculty : Physics, Engineering, Earth and Environmental Sciences, Mechanics (PHITEM), Institute : Business Administration (IAE), Institute : Engineering (Grenoble INP), Institute : Political Studies (Sciences Po Grenoble), Institute : Teacher Training (INSPE), More details: Formerly ESPE. In partnership with Université Savoie Mont Blanc and Rectorat de Grenoble, Institute : Technology (IUT Valence), Institute : Technology (IUT1 Grenoble), Institute : Technology (IUT2 Grenoble), Institute : Urbanism and Geography Alpine, Laboratory : Observatory of Sciences of the Universe, School : Architecture (ENSAG), School : Polytech' Grenoble					
学生数	総数	59500	学部生数	調査したが不明	大学院生数	調査したが不明
受け入れている留学生数	10000		日本からの留学生数	調査したが不明		
海外への派遣学生数	調査したが不明		日本への派遣学生数	調査したが不明		
Web サイト（URL）	https://www.univ-grenoble-alpes.fr					
② 記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。 また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。						
IAU (International Association of Universities) の WHED (World Higher Education Database) 掲載大学である。 https://www.whed.net/institutions/IAU-019745						

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

③ 申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

海外相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】						
① 交流プログラムを実施する相手大学の概要						
大学名称	(日)	ボーフム大学	国名	ドイツ		
	(英)	Ruhr University Bochum				
設置形態	Public		設置年	1965		
設置者（学長等）	Axel Schölmerich					
学部等の構成	Centre : Continuing Education, Centre : Interdisciplinary Research of the Ruhr Area, Centre : Teacher Training, Faculty : Biology and Biotechnology, Faculty : Catholic Theology, Faculty : Chemistry and Biochemistry, Faculty : Civil and Environmental Engineering, Faculty : East Asian Studies, Faculty : Economics, Faculty : Electrical Engineering and Information Technology, Faculty : Geoscience, Faculty : History, Faculty : Law, Faculty : Mathematics, Faculty : Mechanical Engineering, Faculty : Medicine, Faculty : Philology, Faculty : Philosophy and Educational Research, Faculty : Physics and Astronomy, Faculty : Protestant Theology, Faculty : Psychology, Faculty : Social Sciences, Faculty : Sports Science					
学生数	総数	38872	学部生数	調査したが不明	大学院生数	調査したが不明
受け入れている留学生数	6442		日本からの留学生数	調査したが不明		
海外への派遣学生数	調査したが不明		日本への派遣学生数	調査したが不明		
Web サイト（URL）	https://www.ruhr-uni-bochum.de/de					
② 記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。 また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。						
IAU(International Association of Universities)の WHED(World Higher Education Database)掲載大学である。 https://www.whed.net/institutions/IAU-014132						

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

③ 申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

海外相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】						
① 交流プログラムを実施する相手大学の概要						
大学名称	(日) (英)	ボン大学 Rhenish Friedrich-Wilhelm University Bonn		国名	ドイツ	
設置形態	Public		設置年	1818		
設置者（学長等）	Michael Hoch					
学部等の構成	Centre : Development Research, Centre : European Integration, Centre : Teacher Training, More details: Bonner Ausbildungszentrum für Lehrerinnen und Lehrer, Faculty : Agriculture, Faculty : Arts, Faculty : Catholic Theology, Faculty : Law and Economics, Faculty : Mathematics and Natural Sciences, Faculty : Medicine, Faculty : Protestant Theology, Institute : Old Catholic Theology Seminary, Research Division : Discrete Mathematics, Research Division : Late Classical Antiquity					
学生数	総数	31444	学部生数	調査したが不明	大学院生数	調査したが不明
受け入れている留学生数	4500		日本からの留学生数	調査したが不明		
海外への派遣学生数	調査したが不明		日本への派遣学生数	調査したが不明		
Web サイト（URL）	http://www.uni-bonn.de					
② 記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。 また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。						
IAU (International Association of Universities) の WHED (World Higher Education Database) 掲載大学である。 https://www.whed.net/institutions/IAU-013983						

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

③ 申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

海外相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】						
① 交流プログラムを実施する相手大学の概要						
大学名称	(日) (英)	ユトレヒト大学 Utrecht University	国名	オランダ		
設置形態	Public		設置年	1636		
設置者（学長等）	Anton Pijpers					
学部等の構成	Faculty : Arts and Humanities, Faculty : Geosciences, Faculty : Law, Economics and Governance, Faculty : Medicine, More details:University Medical Centre, Utrecht, Faculty : Science, Faculty : Social and Behavioural Sciences, Faculty : Veterinary Medicine, Graduate School : Arts and Humanities, More details:Utrecht, Graduate School : Geosciences, More details:Utrecht, Graduate School : Law, Economics and Governance, More details:Utrecht, Graduate School : Life Sciences, More details:Utrecht, Graduate School : Natural Sciences, More details:Utrecht, Graduate School : Social and Behavioural Sciences, More details:Utrecht, Institute : Education, More details:IVLOS, Institute : Ethics					
学生数	総数	Over 39000	学部生数	調査したが不明	大学院生数	調査したが不明
受け入れている留学生数	Over 5700		日本からの留学生数	調査したが不明		
海外への派遣学生数	調査したが不明		日本への派遣学生数	調査したが不明		
Web サイト（URL）	https://www.uu.nl					
② 記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。 また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。						
IAU(International Association of Universities)の WHED(World Higher Education Database)掲載大学である。 https://www.whed.net/institutions/IAU-019862						

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

③ 申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

海外相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】						
① 交流プログラムを実施する相手大学の概要						
大学名称	(日) (英)	ルーベン・カトリック大学 KU Leuven	国名	ベルギー		
設置形態	Public		設置年	1636		
設置者（学長等）	Luc Sels					
学部等の構成	Centre : Agrarian Bio and Environment Ethics, Centre : Biomedical Ethics and Law, More details:Interfaculty, Centre : Ethics, More details:European, Centre : Risk and Insurance Studies, Faculty : Arts, Faculty : Bioengineering Sciences, Faculty : Business and Economics, Faculty : Canon Law, Faculty : Engineering, Faculty : Kinesiology and Rehabilitation Science, Faculty : Law, Faculty : Medicine, Faculty : Pharmaceutical Sciences, Faculty : Psychology and Educational Sciences, Faculty : Science, Faculty : Social Sciences, Faculty : Theology, Institute : Energy, Institute : Labour Studies, Institute : Language, More details:Leuven, Institute : Philosophy					
学生数	総数	65651	学部生数	27351	大学院生数	28706
受け入れている留学生数	15159		日本からの留学生数	調査したが不明		
海外への派遣学生数	調査したが不明		日本への派遣学生数	調査したが不明		
Web サイト（URL）	http://www.kuleuven.be					
② 記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。 また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。						
IAU(International Association of Universities)の WHED(World Higher Education Database)掲載大学である。 https://www.whed.net/institutions/IAU-010178						

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

③ 申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

参考データ【国内の大学等 1 校につき、①～③は枠内に記入。④～⑤はそれぞれ指定ページ以内】				
※人数等の算定に当たっては、原則として「学校基本調査」による定義に基づき記入。				
大学等名		筑波大学		
① 大学等全体における出身国別の留学生の受入人数（2023 年 5 月 1 日現在）及び各出身国（地域）別の 2023 年度の留学生受入総数				
※「留学生」とは、「出入国管理及び難民認定法」別表 1 に定める「留学」の在留資格を有する者に限る。 ※「2023 年度受入総数」は、2023 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日の出身国（地域）別受入人数を記入。 ※「全学生数」には、日本人学生及び外国人留学生を含めた大学等全体の 2023 年 5 月 1 日現在の在籍者数を記入。				
順位	出身国（地域）	2023 年 5 月 1 日時点 受入人数	2023 年度 受入総数	
1	中国	1279	1466	
2	韓国	117	130	
3	インドネシア	100	130	
4	台湾	80	113	
5	ベトナム	65	78	
6	カザフスタン	45	72	
7	マレーシア	42	48	
8	フランス	36	60	
9	インド	35	39	
10	バングラデシュ	35	41	
その他 (上記 10 カ国以外)	(主な国名) ブラジル、アメリカ等	565	800	
留学生の受入人数の合計		2399	2977	
全学生数		16655		
留学生比率		14.4%		
② 2023 年度中に留学した日本人学生数及び派遣先大学合計校数				
※教育又は研究等を目的として、2023 年度中（2023 年 4 月 1 日から 2024 年 3 月 31 日まで）に海外の大学等（海外に所在する日本の大学等の分校は除く。）に留学した日本人学生について記入。 なお、2023 年 3 月 31 日以前から継続して留学している者は含まない。				
順位	派遣先大学の所在国（地域）	派遣先大学名	2023 年度 派遣人数	
1	台湾	国立台湾大学	46	
2	カナダ	プリンスエドワード島大学	38	
3	マレーシア	マレーシア工科大学	37	
4	フランス	ボルドー大学	21	
5	オランダ	デルフト工科大学	20	
6	フィリピン	フィリピン大学	20	
7	ベトナム	ホーチミン市医科大学	20	
8	オーストラリア	ウーロンゴン大学	18	
9	イギリス	エディンバラ大学	16	
10	カザフスタン	アルファラビ・カザフ国立大学	15	
その他 (上記 10 カ国以外)	(主な国名) タイ	(主な大学名) コンケン大学	620	
	計 41 カ国	計 257 校		
派遣先大学合計校数		267		
派遣人数の合計				
			871	

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

大学等名	筑波大学						
③ 大学等全体における外国人教員数（兼務者も含む）（2024 年 5 月 1 日現在）							
※「全教員数」には大学等に在籍する日本人教員も含めた全教員数を記入。 ※「うち専任教員（本務者）数」には教授、准教授、講師、助教、助手の専任の外国人教員の数をそれぞれ記入。（いずれにも当てはまらない場合には、「助手」に含めること。）							
全教員数	外国人教員数						外国人教員の比率
	教授	准教授	講師	助教	助手	合計	
3039	76	55	49	76	0	256	8.4%
うち専任教員 （本務者）数	14	46	1	76	0	137	

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

大学等名	筑波大学
④ 取組の実績【4 ページ以内】	
1. 国際的な教育環境の構築 【外国語による授業の実施】 本学では、2009 年に「国際化拠点整備事業(G30)」に採択されて以降、「世界との共生」と「国際性の日常化」をスローガンに英語プログラムを整備し、留学生の受入を大幅に拡大してきた。外国語のみで卒業・修了できるコースを開設しているほか、外国語による授業科目を積極的に導入している。また、日本語による授業科目も含めてシラバスの英語化を促進している。 【科目ジュークボックス】 国際的互換性のある教育と世界トップレベルの研究を行う戦略として掲げる Campus in Campus(CiC)構想では、協定校との間で科目ジュークボックスによる授業科目の共有を実施している。科目ジュークボックスとは、大学の壁を超えて授業を共有する独自のシステムである。本学及び CiC パートナー大学が授業科目を提供し合い、学生は受講したい科目を科目ジュークボックスで検索し、留学前に自分の専門や関心に応じた履修計画を立てることができる。2023 年 5 月現在で約 3,800 科目が登録されている。 【留学生との交流】 本学では、「国際性の日常化」を体現するキャンパス環境構築のため、日本人学生と留学生とが日常的に国際交流を行うことができる場として、「スチューデント・コモンズ」を開設している。スチューデント・コモンズでは、国際交流に係る様々なイベントを開催しているほか、海外留学を目指す学生のための説明会や個別面談等、日常的に各種留学サポートを実施している。例えば、筑波大学の学生と海外協定校の学生が、与えられたトピックについて、少人数のグループ内でディスカッションしながら文化交流や意見交換をする「Tsuku-Chat」等が開催されている。 【Japan Virtual Campus (JV-Campus)】 2020 年以來のコロナ禍において、教育のオンライン化が一挙に進展してきた中で、情報化社会における学生ニーズの多様化、留学生及び研究者の流れも大きな変化がみられている。今後も教育の価値を高めるため、ニューノーマルにおける我が国の高等教育の国際教育・交流の環境として、国際競争力のある教育をオンラインで国内外に開放できるプラットフォームを構築し、自大学で開講できない分野や内容の教育の提供・海外に対して日本の強みと魅力ある教育を提供し、国際競争力のあるハイブリッド教育に繋がる環境整備を行うものであり、本学は幹事校として携わり、2022 年 3 月よりパイロット事業を開始している。将来的には、日本の高等教育の国際的玄関口として、日本の大学全体の国際的価値の向上、海外学生のインバウンド、国内学生のアウトバウンド、地方社会をリードする人材育成、リカレント教育、大学の経営強化への波及効果が期待されている。 【トランスボーダーを実現する特徴的な学位プログラム】 本学では、高い研究力を背景とした国際的互換性のある教育システム構築の一環として、外国語のみで卒業・修了できるコースを積極的に開設している。また、本学の強み・特色を活かしたプログラムとして、学士課程では、日本関連企業での就職を希望する留学生のため、日本の文化・社会を理解し、日本マインドを持った留学生を育成することを目的とした Japan-Expert プログラム、分野横断型の学位プログラム(地球規模課題学位プログラム)、工学システムと応用理工学が連携した工学系英語プログラム(総合理工学位プログラム)等を、大学院ではジョイント・ディグリープログラム等を実施している。このように、社会の要請にスピード感を持って対応すべく、国境・組織・分野等のあらゆる壁を超えて研究者が集結し、様々な連携形態を持つ特徴的なプログラムを通じ、地球規模課題の解決の原動力となる人材育成を進めている。主なプログラムを次に示す。	

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

①地球規模課題学位プログラム(2017-)

全学の組織・分野を横断し他大学(国際基督教大学)と連携する文理融合型のオールラウンド型学士学位プログラムとして開設。同プログラムは、地球規模課題全般を俯瞰する幅広い基礎知識を身に付け、人間と環境に関する課題を解決するために分野を超えて必要な情報・技術を自ら意欲的に求めていく姿勢をもち、多くの選択肢の中から最適な解決を意思決定できる人材を育成する。

②総合理工学位プログラム(2019-)

工学システムと応用理工学が連携した工学系英語プログラム。超スマート社会(Society 5.0)における次世代のモノづくりを牽引するための志を持ち、数学と物理の確固たる基礎学力を備えて、モノを扱うミクロからマクロスケールにわたる分野横断的工学分野の課題を第一原理的な視点から理解・分析し、創造的解決に結びつけることのできるグローバル人材を育成する。

③Campus in Campus (CiC)協定校とのジョイント・ディグリープログラム

・国際連携食料健康科学専攻(2017-)

ボルドー大学及び国立台湾大学との連携により開設。人類が地球規模で直面する健康の維持・増進や食料の安全供給等の課題に対して、「医食同源」の理念に基づき、食料が健康に及ぼす影響を科学的に理解し、グローバル社会のニーズと研究開発を橋渡しすることのできる専門力と実践力を備えた国際的な高度専門職業人を養成する。3 大学の学生が共にセメスター毎に日本、台湾、フランスの順に移動して各大学の科目および研究指導を受けることで、本学の強みに加えて各大学の強みを組み込んだ、特徴的なカリキュラムを実施している。

・国際連携持続環境科学専攻(2017-)

マレーシア工科大学に設置されたマレーシア日本国際工科院(MJIIT)との連携により開設。熱帯アジア地域を主な対象に、水資源・水環境、水災害、生態系等の地球規模課題に対し、理学、農学、工学、社会科学等の専門的かつ俯瞰的な洞察力を持って問題解決ならびに持続可能な社会の実現に寄与できる人材を育成する。両大学の学生は、日本・マレーシアを移動し、各大学の授業と研究を受ける。環境分野では国内最初のジョイント・ディグリープログラムである。

④ライフイノベーション学位プログラム(2015-)

筑波研究学園都市のライフサイエンス系の研究所・企業等で構成するつくばライフサイエンス推進協議会及び海外の大学と協働して運営する新たな形式の学位プログラム。「病態機構」「創薬開発」「食料革新」「環境制御」「生物情報」「生体分子材料」の 6 領域を設定。分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度で専門的研究能力を身に付け、バイオリソースを用いてライフサイエンス研究の新たな展開を切り開き、革新的医薬品・機能性食品の研究開発分野及びその保全と管理の分野でグローバルに活躍する高度専門職業人を養成する。

⑤エンパワーメント情報学プログラム(2014-)

情報学と心理・芸術等を融合した博士課程教育リーディングプログラムとして H26 に開設し、補助期間終了後の R2 から自走(事後評価「S」)。「人の機能を補完し、人とともに協調し、人の機能を拡張する情報学」として、新たに「エンパワーメント情報学」を創設し、これからの人類社会にとって、安全性、利便性、心の豊かさの向上といった様々な観点から、人の生活の質を向上させる工学システムを創出できる人材を育成する。

⑥ヒューマニクス学位プログラム(2019-)

卓越大学院プログラムに採択され、H31 年度に開設。本プログラムは、医学と理学・工学・情報学分野の教員が結集する最も学際的かつ最先端の学位プログラムとして、他の学位プログラムを先導する役割を担うと同時に、国内外の大学改革の先導的役割を果たすことが期待されている。

2. 国際化に対応する教員の資質向上

教育・研究の国際的通用性および国際的評価の向上の観点から、国際テニュアトラック制による雇用を促進し、国際公募による外国人教員の積極的な採用や、海外での教育研究歴を有する優秀な教員の確保に努めてきた。国際テニュアトラック制度は、若手教員のテニュアトラック期間中に 2 年以上、海外の一流研究者との共同研究に専念する機会を与える制度として導入され、本制度により採用された教員による

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

TOP1%論文比率は、RU11 平均と比較して約 7 倍と各段に高いものとなっている。また、国際的な教育環境の構築が進むに伴い、グローバル高等教育・国際交流に関する体系的なレクチャーシリーズや、専門教育の授業を英語で行うことを支援するため、「英語で効果的に授業を行うために」と題した FD を企画、実施するなど、教育能力の向上に資する取組を推進している。

3. 国際化に対応する体制強化

【事務職員の高度化】

本学では、「国際性の日常化」というコンセプトのもと、「世界との共生」を担う人材を育成してきた。この間、国内外の大学を取り巻く環境が急速に変化し、国際的な連携及び留学生の対応等、真の国際社会へ向けて果たすべき課題の解決が急務となっている。「世界的研究・教育の拠点」機能の強化を目指して効果的かつ戦略的な展開を進めるため、対応する職員に専門的な知識やノウハウが求められるのみならず、組織として国際競争力の強化を図るため、一体的かつ一貫した対応がより一層重要となっている。国際局グローバル・コモンズにおいて、留学生と職員の英会話パートナー研修、e ラーニング英語研修等の職員の語学力向上に向けた研修や、グローバル高等教育・国際交流に関するセミナー等を実施し、グローバル化を進める大学に最適化された事務職員の育成を進めている。こうした取組により、さらに業務の高度化を推進し、必要に応じて他組織との有機的な連携・協力の下で総合的に国際化に対応し得る事務職員の育成を進める。

【スチューデントサポートセンターの設置】

従前から学生生活支援室を設置し、効果的な修学及び学生生活の支援に関して総括し企画立案を行うと共に、関係組織と密接に連携して学生生活に係るサービスを提供してきたが、留学生の増加に伴い、更なる支援体制の強化や、学生同士の多様な活動を通じ、より協働しやすい環境整備体制を整備するため、2021 年 4 月の事務組織改編により「スチューデントサポートセンター」を設置した。当該センターは学生部、学生生活支援室及び学生相談室との一体的な支援により、日本人学生及び外国人留学生等を区別することなく、全学的観点から国際交流に関するワンストップサービスを提供し、学生の自立性の向上を図ることを目的としている。これにより、より効果的かつ効率的に国際的な見地から学生を支援する協働体制が整っている。

4. 単位の実質化に向けた取組

本学では、人材育成の基本理念や、学生が卒業・修了までに身に付けるべき知識・能力等を「筑波スタンダード」として明確化し、すべての学位について、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを策定・公表し、これに基づく教育の実施状況の点検・改善を継続的にを行い、学位プログラムとしての教育機能の向上を図っている。また、学位取得に至るまでのプロセスを可視化し、学位の質を保証していくためには、質保証の最小単位となる個々の授業科目のシラバスが重要であることから、「シラバス作成のためのガイドライン(シラバスガイドライン)」を作成し、各教員組織・授業担当教員に周知している。

国際的互換性のある成績評価を徹底するため、学士課程の全組織で GPA 制度を導入しているほか、個々の授業科目において十分な学習量を確保するため、1 年間に履修できる単位の上限を学士課程では「45 単位」を基本としている。大学院は、専門職学位課程の 2 専攻では GPA を設定し、それ以外の学位プログラムでは達成度評価の方法を定めて研究指導を含む学修の進展状況を定期的に確認し、きめ細かな学修指導・支援を行っている。こうした単位の実質化と学位の質保証に関する取組は、2020 年 4 月の学位プログラム制移行を機に設置した「教学マネジメント室」によるモニタリング(毎年の自己点検・評価)とプログラムレビュー(数年毎の総合的な評価と対話)において、ルーブリックに基づく検証を行っている。このモニタリング及びプログラムレビューでは、主体的な質保証及び質向上に向けた取組状況を可視化するとともに、各プログラムの自立的な PDCA サイクルの確立を支援し、教育の継続的な改善に資することを目的としている。

大学等名	筑波大学
⑤ 他の公的資金との重複状況【2 ページ以内】	
【卓越大学院プログラム（H30 採択、R3 年度中間評価「S」）】 （ヒューマニクス学位プログラム） 生命の恒常性の原理、個としての「ヒト」の生理と病理を明らかにし、社会の中で「人」として健康で快適な生活が実現できる新たな科学・技術を生み出す学問領域を「ヒューマニクス」と定義し、これを修得した「ヒューマニクス」人材を育成する分野横断型博士課程の学位プログラム（五年一貫制）である。 今回の申請プログラムは学生交流を主体とした教育プログラムであり、卓越大学院プログラムの内容や趣旨に鑑みても、本事業と重複しない。 【大学の世界展開力強化事業（R3 採択）】 （地球規模課題解決に資する教育政策マネジメント専門人材育成プログラム） 日中韓に ASEAN3 カ国を加えた計 6 大学間のコンソーシアムを形成し、地球規模課題の解決に欠かすことのできない学際的・国際的協働のための能力を備えた人材の養成を目標とするプログラムである。 本事業は、欧州との学生交流を主体とした教育プログラムであり対象地域が異なることから、本事業と重複しない。 【大学の世界展開力強化事業（R5 採択）】 （インクルーシブなスマートソサエティーを創成する国際スタートアップ人材の育成） 様々な社会問題を解決する革新アイデアを提案し、それを社会に実装できる国際ソーシャルスタートアップ人材を育成する、米国オハイオ州立大学との共同教育プログラムである。 本事業は、欧州との学生交流を主体とした教育プログラムであり対象地域が異なることから、本事業と重複しない。 【2024 年度海外留学支援制度】 2024 年度において協定派遣（短期研修・研究型）5 件、協定受入（短期研修・研究型）5 件、協定受入・派遣（双方向協定型）4 件が採択された。 本プログラムは、欧州の大学にて半導体等の先端工学に関する学修／研究を行う教育プログラムであり、本支援制度に採択された※1 以外のプログラムと重複しない。 (1) 協定派遣（短期研修・研究型） ・グルノーブル・アルプ大学とのダブルディグリー及び短期交換留学プログラム ※1 （本事業に合わせて、重点政策枠への移行及び他大学への拡大が期待される。） ・中央アジア・コーカサス・バルト・東欧諸国を対象としたマルチリンガル人材育成派遣プログラム ・国際協調イノベーションによる持続的成長を目指す時代にふさわしいリーダーとして活躍できる工学系トランスナショナル人材の育成 ・医療科学分野の大学生交流プログラム（東南アジア派遣） ・日本語・日本文化を基軸とした欧州・アジア「国際・協働科目」プログラム (2) 協定受入（短期研修・研究型） ・KIBI-Tsukuba Research Training Program ・地中海・北アフリカの「環境」問題に取り組むマルチディシプリナル・リサーチ・プログラム ・ウクライナ・中央アジア・コーカサス・バルト・中東欧諸国を対象とした親日人材育成受入プログラム ・持続的な社会の安全・安心に貢献するトランスパシフィック協働人材育成プログラム ・国際連携食料健康科学専攻を通じたフランス・台湾・日本のトライアングル留学 (3) 協定受入・派遣（双方向協定型）	

(大学名：筑波大学) (タイプ： A)

- ・グローバルフードセキュリティーダブルディグリープログラム
- ・持続環境科学のための国際共同教育研究プログラム
- ・筑波大学日独韓共同修士プログラム（TEACH）
- ・オンライン型講義と海外フィールドワーク型演習への参加を通しグローバルな研究力の養成と知のネットワーク形成を目指す交換留学プログラム

補助期間における各経費の明細【年度ごとに1ページ】

補助金申請ができる経費は、当該事業の遂行に必要な経費であり、本プログラムの目的である大学の世界展開力強化のための用途に限定されます。（令和6年度大学の世界展開力強化事業公募要領参照。）

(単位：千円)

＜2024年度＞	経 費 区 分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	〔物品費〕	595		595	
	①設備備品費	485		485	
	・事務用PC等一式(3台)	450		450	
	・無停電電源装置	35		35	
	・				
	②消耗品費	110		110	
	・消耗品(一式)	110		110	
	・				
	・				
	〔人件費・謝金〕	5,450		5,450	
	①人件費	5,250		5,250	
	・契約職員(2人)	4,250		4,250	
	・事務補佐員(1人)	1,000		1,000	
	・				
	②謝金	200		200	
	・講演謝金(5回)	200		200	
	・				
	・				
	〔旅費〕	5,125		5,125	
	・外国出張旅費(525千円×5回)	2,625		2,625	
	・招聘旅費(500千円×5回)	2,500		2,500	
	・				
	・				
	・				
	・				
	〔その他〕	3,830		3,830	
	①外注費				
	・				
	・				
	・				
	②印刷製本費	180		180	
	・プログラムパンフレット	180		180	
	・				
	・				
	③会議費				
	・				
	・				
	・				
	④通信運搬費				
	・				
	・				
	・				
	⑤光熱水料				
	・				
	・				
	・				
	⑥その他(諸経費)	3,650		3,650	
	・ホームページ作成	1,250		1,250	
	・学生派遣旅費支援(4名)	1,200		1,200	
	・学生受入旅費支援(4名)	1,200		1,200	
2024年度	合計	15,000		15,000	

(大学名：筑波大学)

)

(タイプ：A)

(前ページの続き)

(単位：千円)

＜2025年度＞	経 費 区 分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	[物品費]	600		600	
	①設備備品費				
	・				
	・				
	・				
	②消耗品費	600		600	
	・ 消耗品 (一式)	600		600	
	・				
	・				
	[人件費・謝金]	6,200		6,200	
	①人件費	6,000		6,000	
	・ プログラムコーディネーター (2名)	4,000		4,000	
	・ 事務補佐員 (1名)	2,000		2,000	
	・				
	②謝金	200		200	
	・ 留学生チューター (20時間×5名)	100		100	
	・ 講義謝金 (20時間分)	100		100	
	[旅費]	5,500		5,500	
	・ 外国出張旅費 (500千円×6回)	3,000		3,000	
	・ 招聘旅費 (500千円×5回)	2,500		2,500	
	・				
	・				
	・				
	・				
	[その他]	3,700		3,700	
	①外注費	200		200	
	・ ホームページ管理費	200		200	
	・				
	・				
	②印刷製本費	300		300	
	・ 広報資料	300		300	
	・				
	・				
	③会議費				
	・				
	・				
	・				
	④通信運搬費				
	・				
	・				
	・				
	⑤光熱水料				
	・				
	・				
	・				
	⑥その他 (諸経費)	3,200		3,200	
	・ 学生旅費 (8名分)	3,200		3,200	
	・				
	・				
2025年度	合計	16,000		16,000	

(大学名：筑波大学)

)

(タイプ：A)

)

(前ページの続き)

(単位：千円)

＜2026年度＞	経 費 区 分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	[物品費]	600		600	
	①設備備品費				
	・				
	・				
	・				
	②消耗品費	600		600	
	・ 消耗品 (一式)	600		600	
	・				
	・				
	[人件費・謝金]	6,200		6,200	
	①人件費	6,000		6,000	
	・ プログラムコーディネーター (2名)	4,000		4,000	
	・ 事務補佐員 (1名)	2,000		2,000	
	・				
	②謝金	200		200	
	・ 留学生チューター (20時間×5名)	100		100	
	・ 講義謝金 (20時間分)	100		100	
	・				
	[旅費]	4,000		4,000	
	・ 外国出張旅費 (500千円×4回)	2,000		2,000	
	・ 招聘旅費 (500千円×4回)	2,000		2,000	
	・				
	・				
	・				
	・				
	[その他]	5,200		5,200	
	①外注費	200		200	
	・ ホームページ管理費	200		200	
	・				
	・				
	②印刷製本費	200		200	
	・ 広報資料	200		200	
	・				
	・				
	③会議費				
	・				
	・				
	・				
	④通信運搬費				
	・				
	・				
	・				
	⑤光熱水料				
	・				
	・				
	・				
	⑥その他 (諸経費)	4,800		4,800	
	・ 学生旅費 (12名分)	4,800		4,800	
	・				
	・				
2026年度	合計	16,000		16,000	

(大学名： 筑波大学)

(タイプ： A)

)

(前ページの続き)

(単位：千円)

＜2027年度＞	経 費 区 分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	[物品費]	200		200	
	①設備備品費				
	・				
	・				
	・				
	②消耗品費	200		200	
	・ 消耗品 (一式)	200		200	
	・				
	・				
	[人件費・謝金]	6,200		6,200	
	①人件費	6,000		6,000	
	・ プログラムコーディネーター (2名)	4,000		4,000	
	・ 事務補佐員 (1名)	2,000		2,000	
	・				
	②謝金	200		200	
	・ 留学生チューター (20時間×5名)	100		100	
	・ 講義謝金 (20時間分)	100		100	
	・				
	[旅費]	2,000		2,000	
	・ 外国出張旅費 (500千円×2回)	1,000		1,000	
	・ 招聘旅費 (500千円×2回)	1,000		1,000	
	・				
	・				
	・				
	・				
	[その他]	2,200	2,200	4,400	
	①外注費	200		200	
	・ ホームページ管理費	200		200	
	・				
	・				
	②印刷製本費		200	200	
	・ 広報資料		200	200	
	・				
	・				
	③会議費				
	・				
	・				
	・				
	④通信運搬費				
	・				
	・				
	・				
	⑤光熱水料				
	・				
	・				
	・				
	⑥その他 (諸経費)	2,000	2,000	4,000	
	・ 学生旅費 (10名分)	2,000	2,000	4,000	
	・				
	・				
2027年度	合計	10,600	2,200	12,800	

(大学名： 筑波大学)

(タイプ： A)

)

(前ページの続き)

(単位：千円)

<2028年度> 経 費 区 分		補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
[物品費]		100	100	200	
①設備備品費					
・					
・					
・					
②消耗品費		100	100	200	
・ 消耗品 (一式)		100	100	200	
・					
・					
[人件費・謝金]		3,000	3,200	6,200	
①人件費		3,000	3,000	6,000	
・ プログラムコーディネーター (2名)		2,000	2,000	4,000	
・ 事務補佐員 (1名)		1,000	1,000	2,000	
・					
②謝金			200	200	
・ 留学生チューター (20時間×5名)			100	100	
・ 講義謝金 (20時間分)			100	100	
・					
[旅費]					
・					
・					
・					
・					
・					
[その他]		2,200	1,400	3,600	
①外注費		200		200	
・ ホームページ管理費		200		200	
・					
・					
②印刷製本費			200	200	
・ 広報資料			200	200	
・					
・					
③会議費					
・					
・					
・					
④通信運搬費					
・					
・					
・					
⑤光熱水料					
・					
・					
・					
⑥その他 (諸経費)		2,000	1,200	3,200	
・ 学生旅費 (8名分)		2,000	1,200	3,200	
・					
・					
2028年度		合計	5,300	4,700	10,000

(大学名：筑波大学)

)

(タイプ：A)

)